

銅鐸の時代

春 成 秀 爾

はしがき	II 銅鐸の使用された社会
I 銅鐸の用途	1 銅鐸の保有単位
1 地霊と穀霊	2 銅鐸の鑄造地域
2 銅鐸の文様	3 銅鐸の配布
3 銅鐸の使用と「保管場所」	III 銅鐸の終焉
4 銅鐸の使用単位	1 「聞く銅鐸」の消滅
5 銅鐸の埋納	2 「見る銅鐸」の埋納
6 銅鐸の破碎	3 銅鐸祭祀から古墳祭祀へ
	あとがき

はしがき

弥生時代中・後期の首長に集中されつつあった共同体の公的諸機能のうちには、農耕労働・土木工事の組織・指揮に加えて、農耕祭祀等における司祭があげられている（小林 1961：67—73，近藤 1966：451—459，都出 1970：62）。

鏡や碧玉製腕輪など呪的色彩の濃い副葬品を副えられ巨大な前方後円墳に埋葬される古墳時代首長に、司祭者の性格を見出すならば、「首長が司祭権の掌握をととして共同体の再生産に不可分な共同蓄稻を支配」する（近藤 1966：456—457）ことによって、階級的支配者へと成長するコースを想定することが可能であるから、それに先行する弥生時代首長もまた司祭者であった、と考えざるをえないからであろう。

「鬼道を事とし、能く衆を惑わす」という特別な霊力をそなえ巫女としても活動する邪馬台国女王卑弥呼や、「水旱調わず、五穀熟さざれば、輒ち咎を王に帰し、或は言う、当に易えるべし、或は言う、当に殺すべし」という生産力の体现者として豊饒能力をもたねばならなかった朝鮮夫餘王などの例を私たちは身近に知っているし、古墳時代首長が、豊饒と繁栄をもたらす特別な霊威をもった人格として共同体組織を代表する存在であったらしいことも、近年の古墳研究によって次第に明らかにされつつある。

こうして、水稻農耕に基礎をおく古墳時代の首長がすでに自己の神聖化をなし遂げ、

銅鐸の時代

社会からの隔絶化を深めていきつつある状況を、巨大古墳から看取するならば、弥生時代の農耕祭祀と密接なかかわりをもっていたとされる銅鐸を分析する作業に、農耕祭祀のもっとも初源的な形姿や、古墳時代首長出現の具体的なメカニズムを説明する期待をかけることもまちがってはいないであろう。

筆者は先に、銅鐸の埋納と分布のもつ意味について述べる機会があった(春成 1978)が、しかしその段階ではまだ、銅鐸が埋納される前の祭祀をふくむ使用状態を復原することができなかったため、銅鐸と次の時代とのつながりを説明することも、さらには銅鐸のつくられた時代の特徴などについて考察を及ぼすこともできなかった。そのため、埋納のもつ意味の追究もまた当然、限界をもたざるをえなかったのである。小稿では、諸先学の業績にあらためて学び、前稿を修正しながら、言及するところのなかった諸点についての試論を提出することにした。

I 銅鐸の用途

1 地霊と穀霊

銅鐸が弥生時代の農耕祭祀に用いられた祭器であろうという点に関しては、今日、大方の研究者の意見は一致しているといってよい。現段階における到達点とも評価される(田中 1970: 45, 佐原 1974: 100)三品彰英氏の見解によれば、銅鐸は「地霊・穀霊の依代であったから……大地に納めておくことがもっとも大切」で、「それを土から掘り出すことは……地霊・穀霊を地上に迎え祭ること」であった、という(三品 1968)。銅鐸が農耕祭祀のいかなる場面でいかにして使われたかを問題にしようとするれば、当代人の地霊・穀霊観について認識しておくことが不可欠の前提となるわけである。

では、はたして三品氏の説くように、一個の銅鐸が地霊と穀霊という相異なる、しかも時には対立する性格をもつと考えられる両方の霊の依代となりうるのだろうか。大地と地霊(=「大地の成育力」)との間の一体的な関係が、穀霊との間にも同様に成立するとすれば、その証明が必要であろう。

しかし、穀霊についての三品氏自身の研究総括である『古代祭政と穀霊信仰』(三品 1973)の中でも、その点に関する論証は見られない。というよりむしろ、穀霊と地霊とは区別して扱っているし、そればかりでなく別の論文では、「銅鐸は……〈大地に埋められる呪具〉(地霊の依代)として生み出されたものである」と述べているのである

(三品 1973: 604—605)。

三品氏の研究材料となった『記・紀』・『風土記』の記載や、穀霊祭祀の古い形態を保存している東南アジア民族誌においても、^{いなだま}稲魂と「水田あるいは土地そのものを象徴する土地神」とは、別個の霊格を備えたものと観念されている(田辺 1978: 94—95)。私も、穀霊と地霊とは別ものという考えにたつ。そして、日本の祭の本質に関する松平齊光氏のすぐれた総括(松平 1946: 3—42)を参考にしながら、両霊について次のように理解し、銅鐸の用途を穿鑿する前提としておきたい。

あらゆる霊魂は、^{にぎたま}和魂・^{あらたま}荒魂の二者を具有し、その合一として存在しているが、両者は本来的に相対立し、たえず抗争しあっている。霊が人間社会に善をもたらすのは、和魂が荒魂より優位にある時である。逆に、荒魂が和魂に優越する時は、霊魂は邪悪化し(すなわち邪霊となり)、人間に危害を加える。この考え方を地霊と穀霊のばあいにも適用するならば、地霊が荒ぶる時は穀霊に害悪を与えることになり、同様に、穀霊のばあいにも、内部における和魂と荒魂の関係如何により、遊離・逃亡あるいは疲弊などの形をとって人間に災厄をもたらす。それゆえに、農耕生産における豊凶は、穀霊と地霊のそれぞれの内部における和・荒両要素の抗争ならびにその時々々の優者同士の関係によって規定されている、と考えられることになる。

ただし、穀霊・地霊のそれぞれの荒魂を比較するならば、穀霊のばあいは地霊の働きに左右され同化されるという面が少なくなかったから、両者は全体としては強大な地霊と虚弱な穀霊という優劣関係にあるものとしてとらえられていたと思われる。

したがって、農耕祭祀とは、人間が意図的に穀霊・地霊の和合をはかることであるが、実際には、地霊の荒魂を和め穀霊を守護することに重きがおかれることになるのである。

2 銅鐸の文様

① 袈裟褌文

銅鐸の用途を推定する手がかりは多々求められようが、酒井龍一氏は銅鐸に施された文様そのものが重要な手がかりとなることを示した。

氏はまず、銅鐸とその祖型とされる朝鮮の小銅鐸とを比較して、決定的に区別される属性は外面に施された文様帯であるが、しかし、その「文様帯がそれを見るべき人に強い視覚的効果をあげる程印象的なものでない」点に注意し、「对人的に何かをメッセージする」ためのものではないとみる。そして、銅鐸に一貫して共通する文様である「鋸歯文と横帯文ないしは袈裟褌文は、銅鐸の外周を取り囲むべく位置に一貫し

銅鐸の時代

て施され続ける」ところから、横帯文や袈裟襷文は「ものを包み込む帯の抽象化」であり、鋸歯文は「内なる世界を包み込む」「結界」の機能をもっている、と解釈する。では、その「もの」とは何か。

氏は、「銅鐸に封じ込められるものは単に地霊や穀霊であったとみるよりも、より対立概念として強い力を持っている超自然の荒ぶる力であった」と結論するのである(酒井 1978)。

私は、袈裟襷文や鋸歯文が単なる装飾文様ではなく、製作・使用者たちの意志・願望を表現しているとする酒井氏の視点は当を得ていると評価し、氏の視点を継承して「包み込む」内容について検討を加えたいと考える。最初に、検討にいたるに先だって個々の文様についての氏の見解に対する私の修正意見を提示しておきたい。

袈裟襷文は、縦帯の上に横帯を交差させる形状が外縁付鈕式期から突線鈕式期まで通して普通である。上下の関係を明示せず交差させる例は稀で、最初期の四区袈裟襷文と推定される淡路・慶野中ノ御堂、同・上ノ御堂鐸(前者と同範)、東海産と推定される扁平鈕式および突線鈕1式の一部(淡路・「淡路川」、近江・山面1号、飛騨・上呂2号、三河・小島鐸)、ならびに突線鈕3～5式のうち、近畿ⅡC・ⅢC・ⅣC式に限られている。

この事実は、袈裟襷文がまさに襷がけした帯そのものを具象的に表現しているからだ、と私は思う。

袈裟襷文の縦横帯の多くは斜格子文で埋められるが、時に綾杉文(河内・鹿谷寺跡、摂津・桜ヶ丘5号鐸や三遠式の一部)や連続渦文(但馬・気比3号鐸、摂津・東奈良1号鑄型)の例もある。斜格子文は菱環鈕式の中でも最古に位置づけられる淡路・中川原鐸や出土地不明鐸(神田孝平旧蔵→東博)の身部横帯にすでにみられる。ただし、中川原鐸は身部中央の横帯だけは複合鋸歯文となっており、斜格子文は一見複合鋸歯文を簡略化したものかとも思われる。

しかしそのいっぽう、弥生前期末から中期前半にかけて朝鮮から日本に移入された多鈕細文鏡のうち河内・大泉鏡に複合鋸歯文・綾杉文とともに、すでに斜格子文が施されているという事実がある。しかも注目すべきことは、多鈕細文鏡においても、外区に施されるのは複合鋸歯文であるのに対して、斜格子文と綾杉文とは細長い帯として、ある区画とある区画とをつなぐかのような使用上の原則をもっていることで、銅鐸におけるこれらの文様の用い方と共通しているのである。したがって、これらの点からすると、日本の土地で最初に銅鐸をつくりはじめたおそらく南朝鮮渡来の工人たちは、たとえば慶尚北道入室里出土の馬鐸に描かれている複合鋸歯文や多鈕細文鏡等

I 銅鐸の用途

の文様構成の中から、銅鐸の用途・目的にもっともふさわしい二、三の要素を選択して施文したとみるべきであろう。

しかしながら、その起源は何に求められようとも、日本では製作者・使用者とも斜

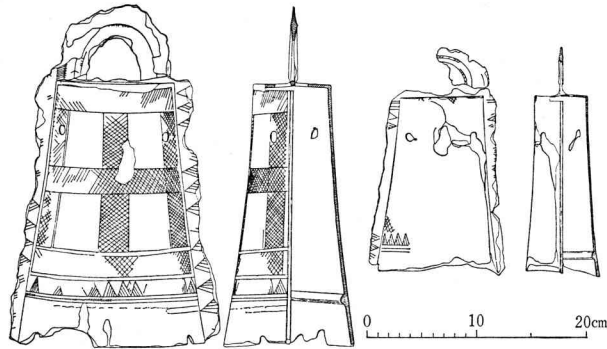


図1 出雲・志谷奥1号・2号銅鐸とその出土状態復原（右は中広銅剣6本，勝部 1976）

格子文は布目の帯、綾杉文は2本の縄目つまりは一種の注連縄^{しめなわ}を表わすものとして意識されていたと考えることもまたできるのではあるまいか。斜格子文や綾杉文のかわりに連続渦文を用いている例（但馬・豊岡市気比3号鐸、摂津・茨木市東奈良1号鐸型）も、斜格子文の上に渦文を付着せしめている状態を簡略化したものと理解することもできるのである。袈裟襷文の帯を二分して半分を渦文にかえている例（備中・井原市猿ノ森、摂津・神戸市桜ヶ丘4号、同・神戸市生駒、紀伊・和歌山市吉里鐸など）も、同様と考えてよいだろう。

突線鈕式鐸の身の突線文も同様に、縦線を横線が切っており、突線紐2～5式の本格的なものは格子文帯の上をさらに紐でくくった形状を呈している。これまた紐なし紐がけそのものの表現とみてよく、帯だけでは不十分という不安感から帯に紐を加えて結縛の効果を一層増強しようとしたものと考えられる。要するに袈裟襷文は、厳密に言えば「包み込む」というより、「結びとめる」意志を示そうとしているのである。

それに対して、鋸歯文は原則的に鰭や鈕の外周を繞り、そして身の文様の上・下の縁を境する文様で、しかも鋸歯はごく少数の部分的例外を除くと内向きであるという特徴をもつ。鋸歯文に期待されている機能は、内に存在するモノが外へ出ていこうとする動きを封じこむことであって、袈裟襷文と軌を一にしているといえよう。

袈裟襷文によって区画された内部にかかれた文様には、双頭渦文や邪視文がある。渦文に一般的に鉤禁と辟邪の両機能があることはすでに指摘されている（金関 1975：34—40）。また邪視文については、「神」そのものの表現という解釈もあるが袈裟襷文や内向鋸歯文の機能を考慮して、辟邪の強い意志を外に示そうとするものであった、と考えておきたい。

私は、銅鐸を地霊・穀霊信仰と関連づけて考える三品彰英氏の視点を参考にしつつ、内にあって結びとめようとされる対象とは穀霊＝稻魂であったと考えたい。酒井氏のいう「強い力をもっている超自然の荒ぶる力」なるものは、私見では、地霊と対立するものではなく、地霊の荒魂に相当するものであって、対立しあっているのは、「荒ぶる力」を備えた地霊と穀霊なのである。そして、「荒ぶる力」は「包み込む」ものではなく、追い払うあるいは和めるべきものである。

② 流水文

しかし、銅鐸は袈裟襷文の一群だけがすべてではない。流水文を鋸歯文帯区画内に充填したもう一群があるのである。

流水文は袈裟襷文とともに一個の銅鐸に使用されることはきわめて稀である。流水文銅鐸の中で最古の位置を与えられている摂津・神戸市桜ヶ丘1号＝伯耆・東泊郡泊

I 銅鐸の用途

=近江・守山市新庄の同范鐸，越前・坂井郡井向1号鐸，そしてそれらの直後に位置づけられる摂津・桜ヶ丘2号=和泉・岸和田市神於鐸などにおいては，両者の共存は

表1 銅鐸の複数個埋納例の組み合わせ（ゴチは三遠式）

旧 国	遺 跡	菱環鈕	外縁付鈕		扁平鈕	突 線 鈕					袈裟襷文	流水文	不明
			1	2		1	2	3	4	5			
石	見	中	野		1	1					1	1	
"	"	上	府		2						2		
*出	雲	志	谷								2		
伯	膏	小	奥		1						2		
但	馬	気	田									4	
備	前	百	比		2						2		
土	佐	葦	月					2			2		
阿	波	長	野		2						2		
"	"	椿	者		2						2		
"	"	星	曲		7						7		
"	"	源	河		2	1					3		
"	"	安	都		4						4		
*紀	伊	荊	真							2	2		
"	"	新	木		2						2		
"	"	堂	井		3						3		
*摂	津	魚	山		10						11	3	
*"	"	桜	ヶ		2						2		
"	"	中	山								3		
"	"	大	田		3						2		
"	"	四	畷		2						2		
"	"	流	木		1	?					?1		
"	"	秋	篠		3						3		
"	"	梅	畑		2						4		
*丹	城	野	々		1						2		
"	波	下	安					(1 1 7 1		1	2		
*近	江	大	山	I				(2 1			9	5	
"	"	大	山	面	2	2	3				2		
"	"	大	山	III							9		
*越	前	大	井	向							1	1	
尾	張	桑	伊	田	2						2		
三	河	白	須	奈				1	2		3		
遠	江	釣	荒	賀						2	2		
"	"	船	神	山				2			2		
"	"	敷	渡	地				2			2		
"	"	木	船	船				2			2		
飛	驒	上	呂		2						2		

(*印以外は佐原眞 1974による)

銅鐸の時代

まったく認められず、但馬・気比1号鐸や摂津・東奈良1号銅鐸鑄型の段階以降に、袈裟襷の斜格子文が連続渦文におきかえられたり、備中・吉備郡妹や阿波・阿南市田村谷鐸のように、突線文のみで斜格子帯を欠いている（ただし、妹鐸は片面の身の上端に斜格子横帯が1本おかれている）。

1本の斜格子横帯と流水文の組合せであれば、摂津・桜ヶ丘3号＝因幡・岩美郡上屋敷鐸（片面の身の下部）、讃岐・観音寺市古川＝伝阿波・香美郡＝因幡・鳥取市越路鐸（2区流水文の中央区画帯）、大和・奈良市早田鐸（片面の中央区画帯）、同・天理市石上1号鐸（同前）、伝阿波・吉野川沿岸鐸（両面の中央区画帯）などが、2本の斜格子横帯（身の上端と中央）との組合せは、大和・石上2号鐸と出土地不明鐸のそれぞれ片面が知られているが、これらの例とて多くはない。

大和・御所市名柄鐸は、3本の斜格子横帯文と流水文が一個の銅鐸に共存する稀有な例であるが、このばあいは表裏をちがえて施文されているのである。

したがって、袈裟襷文と流水文とは相容れない性格をもっていたとする考え方もむげには斥けられない。

その点を、銅鐸が複数個同時に埋納されていた例で検証してみると、表1のように、36例のうち袈裟襷文鐸と流水文鐸が共存していた例は3例にすぎない。合計24個の銅鐸が出土した近江・大岩山のばあも、3地点に分かれて埋納されていたが、ただ1個の流水文鐸はそれのみが単独で1地点に埋納されていたのであった。こうした点を強調すれば、袈裟襷文と流水文とは基本的に排他的な傾向をもっていた可能性を説くこともできよう。

流水文については、それをその名称のとおり水の表現だと解釈する説がある。それに対して、佐原眞氏は、流水文が近畿地方縄文晩期の弧状文の系譜をひく文様であること、1条からなる初期の横型流水文が水のイメージにはほど遠いことを詳細に論じており（佐原 1972：9—24）、従うべきであろう。しかし当然のことながら、抽象的な表現に何らかの意味がかくされている可能性まで、氏は否定しているわけではない。

流水文鐸と袈裟襷文鐸とは排他的な関係にあるようにみえるが、といっても両者とも形状においても音をたてる呪器という点においてもかわりはない。また、外周を鋸歯文帯がめぐるといふ点も共通している。鋸歯文が靈魂の遊離を阻止する機能をもっていたとする考えを導入するならば、流水文は袈裟襷文鐸では空白として消極的に表現された稻魂そのものの抽象文様である可能性も一応は検討したほうがよいかもしれない。しかし、流水文＝稻魂とするには、流水文が縄文晩期前葉の文様に起源をもつうえに、銅鐸のみならず各種土器・木製容器・竪杵、骨角製ヘアピンなど多様な器物

を飾っているという難点がある。

したがって、今はむしろ、流水文一般も靈魂を緊縛する機能をもっているとみなし、銅鐸の流水文に関しては、袈裟襷文にかわって稻魂を結びとめる機能をもった帯なり紐なりの抽象である可能性のほうを考えたい。そして、袈裟襷文と流水文の二者が並存していた理由は、製作工人の系譜のちがいなど別のところに求めたいと思う。

越前・井向1・2号鐸や大橋八郎旧蔵鐸、摂津・桜ヶ丘4・5号鐸などにみられる区画内の絵画については、小林行雄氏(1959: 51—53, 1967: 212—218)の農耕讃歌ないしは祖神讃仰とみる有力な所説がある。さらに最近では、大林太良氏(1979: 209—211)が考古学研究者の意見を巧みに摂取して、「世界の秩序を表現したもの」とする新説を提出している。筆者は細かな私案はまだ用意していないけれども、上記のような銅鐸文様の基本的理解の延長上におくと、描かれている動物は水田を荒し稻魂に危害を加えたり稻魂を驚かせたりする獣(鹿・猪)・鳥・魚・虫等としてとらえられるふしがあり、全体としてはそうした動物を駆除し稻魂を守る「説話」の表現と解釈することも不可能ではないように思う。流水文鐸に特徴的にみられる鹿の横列帯も、角を表

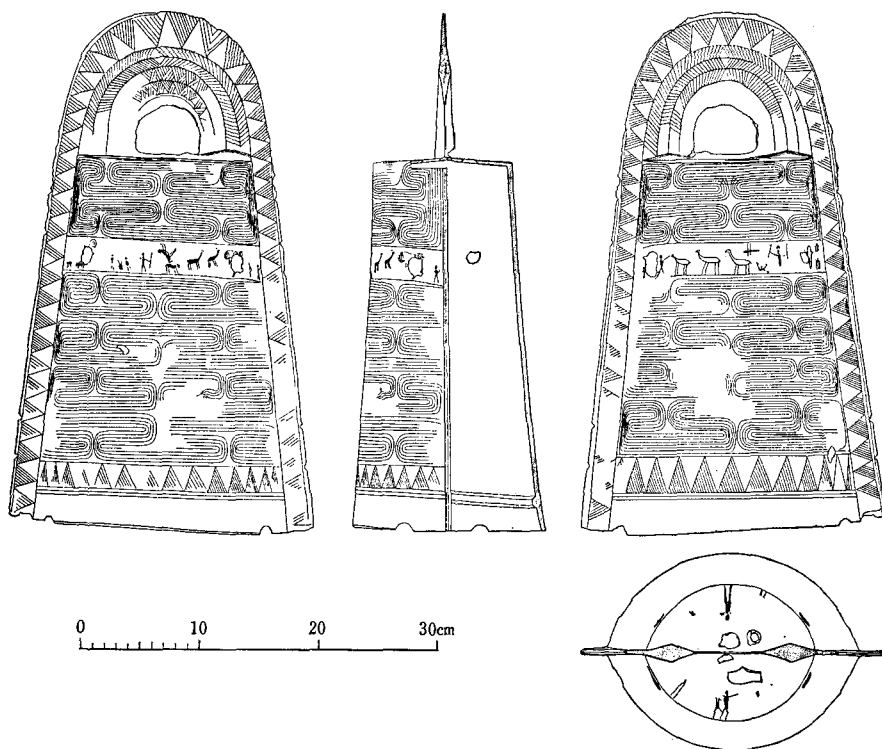


図2 摂津・桜ヶ丘1号銅鐸の流水文と絵画(桜ヶ丘銅鐸銅戈調査委 1966)

現していない点(佐原 1980:114)を重視するならば、結びとめておこうとする稲魂への供犠ととらえることもできるのである。

3 銅鐸の使用と「保管場所」

銅鐸の日常の保管場所については、佐原眞氏の地中説(1960b:166, 1974:97—98)が有力な仮説であろう。というより、他に説らしい説が提出されていないために結果的に有力視されているにすぎないともいえる。

氏は述べる。「銅鐸は日常の生活からまったく切り離され、聖域ともいうべき場所に埋められて保管され、祭儀のおりにだけ取り出されて用いられた」が、「銅鐸の祭りが終りをつげたため、銅鐸はそのまま地中におきざりにされた」。すなわち、「この解釈では、全銅鐸がほぼ同じころ地中に放置されたとみとめるわけである」。

たしかに、天然の巨岩の下から銅鐸が出土した安芸・広島市福田木の宗山や但馬・豊岡市気比、讃岐・坂出市明神原、山城・京都市梅ヶ畑(田辺・佐原 1964)などの報告例はあるし、また銅鐸の上に意識的に石をおいた播磨・宍粟郡青木(赤松・三木 1969:258—262)や出雲・八束郡志谷奥(勝部 1976:5)などの例も知られている。

埋納場所として巨岩の下が選ばれたのは、祭儀のおりに容易に取り出すことができるようにといった配慮からきたものではなかったにせよ、結果的にそれが標識の役割をはたしていることは事実で、そこが聖域であったといえはいえないことはない。しかし、こうした例は実はきわめて稀なのである。「大多数の銅鐸の埋納場所は共通している」とはいえ、丘頂に近い斜面や平野の末端すなわち地形上の境界が多いといったせいぜい一般的な立地の共通性を指摘しうるにとどまるのである。もちろん、例えば今は腐朽し去った老巨木を標識にしていたのだ、といった反論も可能であろう。だが、発見地即保管場所とする主張には、紀伊・和歌山市有本(佐原・町田 1968)や同・砂山(森 1974)など紀ノ川の河床や、和泉・堺市浜寺(島田 1928)の海岸砂丘からの発見例などを想いおこしただけでも従いがたい。

しかも、土中保管説は、土中あるいは湛水した石灰岩洞穴内に埋めておき、使用する時にだけとり出す東南アジアの銅鼓(De Beauclair 1960:154, 大林 1979:204)を傍証とするが、そうした例は、実は、数ある銅鼓の保管方法のごく一部にとどまっていること、銅鼓が銅鐸と根底において共通する思想のもとに創出されたものであるとしても両者はあくまでも別物であるだけになんとも心もとない。

祭儀のために「ほり出すたびに土をはらって洗いがいた」結果、表面が「磨滅」したのだ(佐原 1974:97)、といった臆測もなされているが、それならば銅鐸は土中

に裸で埋められ保管されていたのか、という素朴な疑問もわいてこよう。表面の「磨滅」現象にしても、それは古い型式に特徴的なことであって、すでに扁平鈕式の段階になると、摂津・桜ヶ丘6号鐸のように、「磨滅」を指摘できないものがある。しかも、「磨滅」が実は、石製鑄型による鑄造、あるいは銅・錫の比率がもたらした湯冷えに由来するものでないことの証明も、まだなされているようには思えない。いわゆる「伝世鏡」における「磨滅」か「湯冷え」かの議論と同じ問題をかかえているのである。

銅鐸の保管場所を考えるうえで、特に重要な手がかりを提供しているのは、銅鐸を鳴らすための舌の出土例であるように思われる。これまでに報告されている舌の出土例は、次のとおりである。

- 1 出雲・松江市西川津^{なてもよう}堅町 石舌1 集落址から遊離出土
- 2 伯耆・東伯郡泊村小浜 銅舌2 外縁付鈕1式鐸1に伴出
- 3 淡路・三原郡西淡町慶野中ノ御堂 銅舌1 外縁付鈕式鐸に伴出
- 4 紀伊・有田市山地 銅舌1 外縁付鈕1式?鐸1に伴出
- 5 紀伊・和歌山市太田黒田 石舌1 外縁付鈕1式1に伴出、棒状の自然石
- 6 土佐・南国市田村西見当 銅舌1 集落址から遊離出土

すなわち、銅鐸に伴った例が4例、遊離して集落址から出土した例が2例あるにすぎず、銅鐸の圧倒的多数については、伴出が確認されていないか、あるいは確実に伴っていない。銅鐸の舌は、その基部が穿孔されているのが普通であるから、紐で本体に付属させてあったろうことは容易に推定できる。「見る銅鐸」はともかく、「聞く銅鐸」や三遠式鐸のばあい、銅製または石製の硬質の舌を内部に垂下してそれと内面突帯との接触によって音響が発せられ、その結果突帯の磨滅も生じたとすれば、舌の伴出例があまりにも僅少であり、かつ集落址からの遊離出土例も存在する事実のもつ意味は、十分に追究されてしかるべきであろう。

銅鐸の埋納時に何ゆえに本体から舌が外されたのか、その理由を明らかにすることは容易ではないけれども、舌がないかぎり銅鐸を鳴らすことはできないのであるから、それが銅鐸の使用状態の停止または否定と関連していることだけは確かであろう。それだけでなく、この事実は銅鐸の土中保管説が不自然であることも指し示しているように思われる。なぜなら、銅鐸は祭儀の時だけ土中から掘りだされ、その後はまた土中に埋めて保管するというのであれば、銅鐸の不可分の一部をなす舌を、埋納時にはとり外しどこかに保管しておき、地上で用いる時のみ装着するというのも、妥当な解釈とは思えないからである。むしろこの事実は、銅鐸の埋納は即土中保管を意味する

銅鐸の時代

のではなく、埋納は銅鐸使用の最後の形態であったことを示唆していると考えべきなのである。

さて、銅鐸を穀霊信仰と関連づけて理解するのであれば、その「保管」場所も、同様の観点から具体的に考察していくことが必要であろう。

日本農村や東南アジアにのこっている、あるいは近年までのこっていた古俗によれば、稲魂は、すべての収穫に先がけて摘みとられた初穂に宿るとみなされている。そうでなければ、逆に、最後に摘みのこされた稲穂に稲魂がこもるとみなされている民族例も知られている。さしあたっては、前者であるか後者であるかは重大な問題ではないので、稲魂は初穂にこもるということで論を進めていくが、初穂は、収穫祭に際しては祭祀の対象であり、その後も翌年の種粃の一部として保管されるのであって、決して食用とはされない。初穂が豊饒と繁栄をもたらすきわめて重要な機能と聖性をもつものと観念される理由はここにあるのであって、穀霊祭祀の原始形態は初穂そのものを祀る形態なのであった（三品 1973：412，小野 1977：64—81）。

しかし推定すれば、初穂だけを祀るこの形態も最古というよりは、若干なりとも進んだ形態であつたろう。なぜなら、生き物である稲穂一般に靈魂がこもっていないということはありえないことであるし、また、種粃は初穂でなくともよく、事実、実際に播種するばあいには、初穂は種粃のごく一部分を占めるにすぎないからである。初穂なる観念は収穫稲のうち、一部を種粃としてのこし他を食用とする必要から生じた祭祀対象の限定に由来するのであって、もっとも早く稔熟し活力のあることを顕示した初穂に当年の全収穫稲の穀霊を凝縮・体现させているといえよう。ともあれ、稲魂の中核部分は初穂に宿ると信じられていたとすれば、稲魂は初源的には、初穂の保管場所と水田との間を循環するという基本的性格をもつことになる。

では、初穂はどこに保管されたのであろうか。初穂が翌年の種粃の一部として消費されるとすれば、種粃一般とまったく異なる保管方法をとっていたとは考えにくい。銅鐸そのものにも鑄出された高床倉庫つまり穀倉の中に他の収穫稲とともに収納された、と私は考える。高倉が後の神社本殿の建築様式に採用され、両者の系譜的連続性が明瞭であることも、その傍証となろう。すなわち、それはもっとも貴重で聖なるものを収納する場所は建物の内部であり、その形態は高倉であるとの固定観念が神社成立以前にすでに形成されていたという背景があったからにちがいない。農耕社会にはいつから最初に霊質を認められたものは、初穂＝稲魂であったと思われるが、初穂といえども摘んでしまえば他の稲穂と変るところはない。したがって、取扱いをちがえることによって他と区別する必要がある。収穫儀礼の過程で、あるいはそれが終了

したのち、想像をたくましくすれば、毎年新規に製作された「飾られた」壺形土器の中に密封し、高倉内のいずこかに安置することによってそれをはたそうとするのである。もともと「神体」というものは——このばあいは初穂——、必要な時は神殿からとり出して使用するものなのであった。

このように、稲魂は秋から春までは高倉にあり、春から秋までの間は水田にあり、毎年両者の間を循環する。とはいえ、それは豊饒はたたかいとるのだという緊張感を忘れてしまったあくまでも現代人の言い方にしかすぎない。靈魂不滅とはいえ、穀霊は稲刈に厳重に結びとめておかないと遊離したり逃亡してしまう。

う。それだけでなく、稲魂は必要な時には振るい起こすことを怠ると萎えてしまう。稲魂の容れ物＝依代である稲刈には肉体と同様に生死があるのだ。だから稲魂は絶えず祀っておかなければならないのである。農耕祭祀はここに起源する。

春が到来し高倉に祀っていた初穂をさげて他の種籾に混ぜて播種する時は、物忌みの状態にあった稲魂を水田に遷し活発な働きを切願する機会であった。稲穂を人間にたとえるならば、稲魂が新たな依代についた出芽は誕生であり、稔った穂首を摘む収穫は殺戮であり死であったろう。

いずれにせよ、稲魂そのものは不滅であったが、稲も死と再生をくり返すものであって、死した稲穂の魂を次の稲に継承・再生させるということの発想が、実は、のちの霊継ぎの觀念の祖型となるものであった。したがって、春に行なわれる稲魂の継承儀礼は予祝行事といわれてはいるが、それは安堵と満足感に占められた秋の収穫祭とちがって、共同体の存亡のかかった不安と緊張にみちた重大な祭祀なのであった。

かかる重大な機会には、地霊の荒魂を和め、寄りくる諸々の邪霊を祓うと同時に、当然、稲魂を揺り動かすことが必要とされる。さらに、播種後収穫に至るまでの間も、旱魃・豪雨・長雨・強風などの形をとって荒ぶる地霊が稲魂をおびやかす事態は発生する。そうした定期的・臨時的にとりおこなわれる祭祀の場こそ、悪霊を祓い、

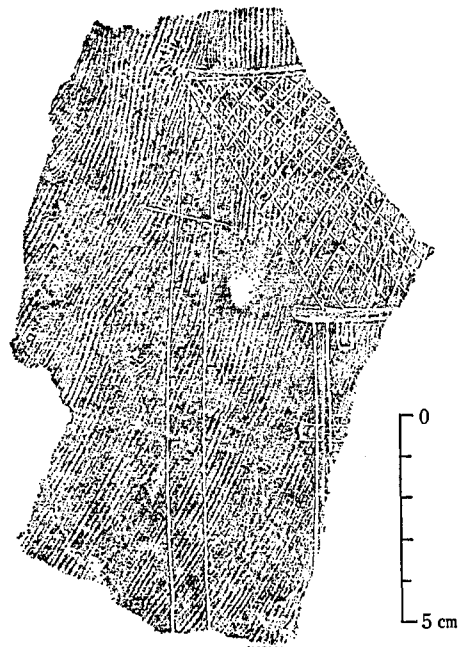


図3 弥生土器に描かれた高床倉庫（大和・唐古遺跡出土）（網千 1963）

銅鐸の時代

稲魂を励まし稲穂に結びとめておくべく銅鐸から金属音が発せられるにもっともふさわしい、と私は考える。

では、稲魂が循環している間、銅鐸はどこにあったのだろうか。稲魂が水田にある春から秋までの間は、たしかに稲魂は土中にあり、その運命は地霊に委ねられることになる。だが、その間、銅鐸も土中に埋められて「保管」されていると考える必要はない。地上のどこかに置いてあり、祭祀の時にはそこからとりだされて鳴らされたと考えたほうがよいのである。では、稲魂が高倉に坐す時はどうか。このばあいには、土中に埋められている可能性はもはや考えられない。このように、稲魂がいずこにあるとも銅鐸が土中に埋められている可能性は少ない。銅鐸は、収穫後から播種時まで

表2 近江・大岩山Ⅰ銅鐸群の構成
〔届出書類〕

番号	高さ(曲尺)	換 算	重 量
1号	4尺1寸7分	126.4cm	13貫000匁
2号	2 3 0	69.7	3 900
3号	2 3 0	69.7	2 600
4号	2 2 5	68.2	2 800
5号	2 2 0	66.7	2 800
6号	2 1 0	63.6	2 800
7号	2 1 0	63.6	2 500
8号	2 0 5	62.1	2 300
9号	2 0 0	60.6	3 200
10号	1 8 5	56.1	1 700
11号	1 6 7	50.6	2 000
12号	1 6 5	50.0	1 100
13号	1 5 2	46.1	1 400
14号	1 5 0	45.5	1 200

稲魂を緊縛し守護すべく稲魂とともに特定の高倉内に安置され、そして播種後収穫にいたるまでの間も、通常は高倉内に安置されていたと考えるべきであろう。

4 銅鐸の使用単位

銅鐸はときに1個所に複数個同時に埋納されている。銅鐸の発見地約280個所のうち、2個以上の出土例は、51個所ある。それらのうち、2個一括出土するばあいの35個所については、2個セットとして使用されていたという可能性が考慮されている(田中 1970: 56—58)。

〔現存〕

所 蔵	型 式	文 様	高 さ	推・届出番号
東京国立博物館 1号	突5式	近畿ⅣB	134.5cm	1号
東京国立博物館 2号	突3式	近畿ⅡA	74.4	2号
ケルン東洋美術博物館			71.2	
天理参考館(神田喜一郎旧蔵)	突3式	近畿ⅡA	69.5	
知恩院	突3式	近畿ⅡA	67.5	
天理参考館	突3式	近畿ⅡB	66.5	
ドゥ・ヤング記念博物館	突3式	近畿ⅡC	62.7	
辰馬考古資料館(伊達弥助旧蔵)	突3式	近畿ⅡC	59.7	9号
辰馬考古資料館	突3式	三遠式	50.7	11号
マサイアス・コモー コレクション	突3式	近畿ⅡC	44.4	14号

たしかに、複数出土は、全体の約18%にとどまるから、実証的にはその程度にとどめておいたほうが無難かもしれない。しかし、この点に関しては再考すべき余地がのこされていると私は考える。なぜなら、3個以上出土したばかりでもそのうちに同大、ほぼ同型式の2個セットを容易に考えさせる鐸が含まれているからである。

すなわち、1881年に発見された14個からなる近江・野洲郡大岩山Ⅰは、現存するもので、ケルン東洋美術博物館鐸——天理参考館鐸（神田喜一郎氏旧蔵）、知恩院鐸——天理参考館鐸の

2組、発見当時の届出書類によると、1号と10号鐸をのぞくと、2号——3号、4号——5号、6号——7号、8号——9号、11号——12号、13号——14号の6組の存在を知りうる（表2）。

1962年発見の9個からなる大岩山Ⅲも、1号——2号、4号——5号、8号——9号の3組を指摘でき、近畿式と三遠式の両要素をもつ3号をのぞくと、6号と7号も一対とみれないことはない（表3）。

14個からなる摂津・神戸市桜ヶ丘は、3号・6号・11号・12号をのぞくと、1号——2号、4号——5号、7号——8号——9号——10号、13号——14号の5組である（表4）。ちなみに、共伴した銅戈の数は、銅鐸数の2分の1の7本であったことも示唆的である。

同様のことは、3個以上出土した他の例についても指摘できる。すなわち、但馬・豊岡市気比、阿波・徳島市阿都真、山城・京都市梅ヶ畑は二対4個からなっており、阿波・徳島市源田（2号・3号）、紀伊・御坊市亀山（1号・3号）、河内・門真市大和田（1号・2号）、大和・奈良市秋篠（1号・2号）、三河・宝飯郡伊奈（2号・3号）は、3個のうち2個が対をなしているのとれるのである。

とすると、一遺跡で対をなさないものは、実は他の遺跡のものと本来は一対をつくっていたのではないかと、との疑いも生じてくる。事実、秋篠3号のばあいは、約25m離れて出土した同4号鐸と対をなしているとみることもできるし、桜ヶ丘3号は摂津・芦屋市堂ノ上鐸と、桜ヶ丘6号は伝・兵庫県出土大阪市立博物館蔵鐸と、桜ヶ丘11号は摂津・神戸市渦森鐸と、桜ヶ丘12号は摂津・伊丹市中村鐸と（表4）、伊奈1号

表3 近江・大岩山Ⅱ・Ⅲ銅鐸群の構成〔大岩山Ⅱ〕

番 号	型 式	文 様	高 さ
(10号)	突1式	全面1区流	54.2cm

〔大岩山Ⅲ〕

1 号	突1式	6 区 袈	46.0cm
2 号	突1式	6 区 袈	47.2
3 号	突2式	突線6区袈	47.5
4 号	突2式	近 畿ⅠA	53.8
5 号	突2式	近 畿ⅠC	55.2
6 号	突3式	近 畿ⅡA	57.7
7 号	突3式	近 畿ⅡA	68.5
8 号	突3式	三 遠 式	78.7
9 号	突3式	三 遠 式	80.6

銅鐸の時代

表 4 旧・摂津国出土の銅鐸

遺 跡	番号	型 式	文 様	高 さ	備 考	
神戸市灘区・桜ヶ丘	1号	外1式	2 区 流	42.9cm	神戸市渦森鐸に類似	
	2号	外1式	2 区 流	42.4		
	3号	外2式	2 区 流	44.5		
	4号	扁 式	4 区 袈	42.0		
	5号	扁 式	4 区 袈	39.2		
	6号	扁 式	6 区 袈	63.7		
	7号	扁 式	6 区 袈	41.9		
	8号	扁 式	6 区 袈	42.2		
	9号	扁 式	6 区 袈	42.9		
	10号	扁 式	6 区 袈	42.8		
	11号	扁 式	4 区 袈	45.3		
	12号	外1式	4 区 袈	31.4		
	13号	扁 式	4 区 袈	21.9		
	14号	扁 式	4 区 袈	21.05		
伝・神戸市灘区・大月山		外1式	4 区 袈	41.3	宝塚市中山1・2号鐸と同範	
神戸市東灘区・渦森		扁 式	4 区 袈	47.9		
神戸市東灘区・生駒		扁 式	6 区 袈	53.2	中山2号, 伝神戸市大月山鐸と同範 中山1号, 伝神戸市大月山鐸と同範	
神戸市東灘区・森		外2式	4 区 袈	32.4		
芦屋市楠町・堂ノ上		外2式	2 区 流	45.3		
西宮市・津門		扁 式	6 区 袈	41.5		
宝塚市・中山	1号	外1式	4 区 袈	42.6		
	2号	外1式	4 区 袈	41.9		
川西市・満願寺		突2式	近畿ⅠB	63		
川西市・栄根		突5式	近畿ⅣB	109		
伊丹市・中村		外1式	4 区 袈	20.8		
豊中市・桜塚	1号	外1式	2 区 流	32		
	2号				讃岐・我拝師山鐸と同範, 東奈良2号鑄型製 行方不明 鱗部飾耳破片	
豊中市・利倉		突3式	近 畿 Ⅱ		ボストン美術館	
吹田市・山田		外2式	4 区 袈	45.5		
箕面市・如意ヶ谷		突3式	近畿ⅡB	85.5		
高槻市・天神山		突2式	近畿ⅠA	60.5		
推・高槻市・天神山		突4式	近畿ⅢC	109		
大阪市大淀区・長柄		突2式	突線6区袈	53.2		
参考資料						
伝兵庫県		扁 式	6 区 袈	58.7		大阪市立博物館
「鑄放し」銅鐸		扁 式	6 区 袈	68.3	辰馬考古資料館	

は三河・豊川市源祖鐸と対になっていたようにも思われる。

さらに、2個一対の考えを1個出土鐸のばあいにも敷衍するならば、やはり、同

型式同大の2鐸が比較的近接して出土した例を指摘することが可能なばあいがある。約15m離れて出土した大和・天理市石上の1号・2号鐸、伯耆・東伯郡八橋と米里（出土地点間の距離約13.5km）、因幡・岩美郡上屋敷と鳥取市越路（16.8km）、伝伯耆と安芸・広島市福田、備中・井原市下稲木と猿ノ森（2.0km）、播磨・宍粟郡須賀沢と佐用郡下本郷（8.8km）、播磨・宍粟郡閭賀と加古川市望塚（46.5km）、讃岐・善通寺市大麻山と木田郡源氏峰（35.8km）、紀伊・日高郡雨請山と伝大久保、淡路・三原郡倭文と伝淡路国、淡路・三原郡中ノ御堂と上ノ御堂（同範，300m）、摂津・川西市満願寺と高槻市天神山（20.8km）、遠江・引佐郡分寸と猪久保（1.0km）、遠江引佐郡滝ヶ峰1号と不動平（500m）といった組み合わせを想定することもできないのではないのである。

田中琢氏は、3個以上まとまって出土したばあいは、但馬・気比や阿波・安都真（＝備前・倉敷市種松山鐸と同範）のように、そのうちに他遺跡出土鐸との間に同範関係をもつものが含まれているいっぽう、たがいに同範関係にあるものが含まれていないことを根拠に、「もし最初から数個の銅鐸を同時に使用する必要があったのなら、同範で同時に製作可能の銅鐸を同じ場所で使用していてもよいはずだが、……その例は一つもない」といい、集団の統合にもとづく集積と解釈している（田中 1970：57－58）。

けれども、2個セット使用と考えられているばあいでも、その後判明した摂津・宝塚市中山の同範関係にある2個一括出土例（藤井・田代・島田 1976）以外は、やはり同範関係にはないのである。したがって、氏の論拠からすれば、銅鐸はすべて一祭祀集団につき1個の単独使用であり、2個以上出土するばあいも、それがいかに類似した鐸を含んでいたとしても、集積であるとみなすべきなのである。

それでは、大岩山Ⅰ・Ⅲや桜ヶ丘における同型式同大の2個についてはどう考えるべきか。それは偶然的な結果とみなすのも一つの解釈である。すなわち、別々の集団に保有されていた銅鐸が多数集合された時、その中にたまたま類似するものが2個見出されたにすぎない、と考えるわけである。私もこの解釈を全面的に否定しようとは思わない。ただ偶然ならなぜ2個に限られ3個がないのかという疑問がのこる。したがって、偶然ではなく、たとえば、2個セット使用するさいには、目的は一つでも各々の役目は決められており、紛らわしい同範鐸は避けるという原則が定められていたと解釈することもできるし、同範鐸同士に鑄造集団が特別な間柄を認め、むしろ意識的に切り離したと考えることもできよう。

もっとも、そうはいうものの、すべての銅鐸が最初から2個一対であったと考える

銅鐸の時代

必要もまた、ない。鑄造集団を異にするかと推定される扁平鈕式4区袈裟襷文と同6区袈裟襷文の組み合わせも認められることからすれば、当初は1個で使用されていたものが後になって2個対になって使い分けされるようになったばあいも当然あったであろう。もちろん、最初から最後まで1個であったばあいも考えるのである。

銅鐸は2個一対で使用されることがそれほど稀ではなかったと主張することは、銅鐸1個の背後に一祭祀集団を想定し組み立てられてきた銅鐸論に影響するところがあり、あまりにも大きいのであるが、そうだとすれば、一応、3個以上出土したばあいが、1.5組以上の集積と解されることになる。そして、大岩山Ⅰや桜ヶ丘の14個のばあいは、6組+2個と2組2個（プラス2個）の少なくとも本来は合計8組16個が同時に存在したと復元されることになるろう。

それでは、常時2個セットで使用されていたとすれば、1個出土例が全体の約82%にも達するという事実はいかなることを意味するのであろうか。次節で述べる埋納と関係することであるが、非常時に2個の銅鐸を2地点に分けて埋納しなければならないばあい（あるいは1鐸を埋納し、1鐸をのこすばあい）と、同一地点に2個埋納するばあいの2～3のケースがあったということではないだろうか。そして、稲魂にとっての非常時に銅鐸が埋納されたとするならば、ある集団にとっての非常時は他の集団のそれにとってもしばしば同様であったと考えられるから、何個もの銅鐸が時を同じくして何個所もの地点に埋納された可能性をも考慮のうちにいれておく必要がある。1個の鑄型で5個鑄造した例などは、同時に複数集団に対して配布しなければならなかった事態が時々生じたことを物語っているのであろうか。

5 銅鐸の埋納

銅鐸は埋納されるまでの一定期間は、稲魂を結びとめその成長を守護する機能をもつものであった。それでは、かかる豊饒をもたらす呪器たる銅鐸が、何ゆえに地中に永遠に埋納されなければならなかったのであろうか。

銅鐸埋納の意味を論ずる際の前提は、銅鐸の埋納時期の推定である。銅鐸の埋納時期については製作時期と同様、諸説あるが大きく二説に分けることができる。一説は、鑄造時期のちがいつまり型式差とは関係なく弥生時代後期終末ないしは古墳時代初頭に埋納されたとする（田中 1970: 51—52）。もう一説は、伝世使用は認めるが原則として、古い銅鐸は古い時期に、新しい銅鐸は新しい時期に埋納されたとみなす（川西 1975: 42, 春成 1978: 90—93）。

前者の論拠は、複数個同時埋納例のなかに、井向（菱環鈕2式1個、外縁付鈕1式

1個)、桜ヶ丘(外縁付鈕1式3個、同2式1個、扁平鈕式10個)、源田(扁平鈕式2個、突線鈕1式1個)、大岩山I(突線鈕3式8個、同5式1個、不明5個)、大岩山III(突線鈕1式2個、同2式3個、同3式4個)のように、新旧諸型式を含む例が知られているところにある(表1)。さらに、菱環鈕式～突線鈕1式までの「聞く銅鐸」の内面突帯にみられる磨滅を長期にわたる舌との接触すなわち長期使用の結果とみる。

しかしながら、新旧諸型式の共存といっても、実際には隣接している型式同士が常態であって、たとえば外縁付鈕式と突線鈕1式以降、扁平鈕式と突線鈕2式以降の組み合わせは1例も知られていない。また、前稿でふれたように、一平野に面して数十～500mていどの近接する別地点から銅鐸が発見された例も少なくない。したがって、私は銅鐸の伝世使用は当然認めるが、製作から埋納までの期間を極端に長く見積もらないで、基本的に古い型式は古い時期に埋納された、少なくとも外縁付鈕式が突線鈕式の時期にまで伝世されることはほとんどなかったのではないかと考える。そして、桜ヶ丘や大岩山I・IIIのように、新旧二、三型式におよぶあいでも、古いほうの埋納がおくれたために生じた過渡期にみられる一時的な共存と理解するのである。そして、かかる現象の存在こそ、各共同体の保有する銅鐸がほとんど同時に埋納されることがなかったことを示唆していると考えたい。さらに、桜ヶ丘6号鐸のように表面および内突帯がきわめて新鮮な状態にあって鑄造後まもないうちに埋納されたと推定されるものと、同1号・2号・12号鐸のような内突帯の磨滅した外縁付鈕1式とが同時に埋納されている例から、埋納という事態は突発的に生ずるものであったと推定する。

埋納の意味については、私は前稿においてすでに考えの一端を示しておいた(春成1978)。いま述べてきたことと結びつけるならば、旱魃・豪雨・虫害など稻魂をおびやがす非常事態の発生時においては、稻魂を守護できないかもしれぬという恐怖感・不安感が、稻魂の坐す平野へのいくつかの通路のうち、彼らがその時々邪霊の侵入路と推断したその入口付近で銅鐸祭祀を行なった後埋納された、と考えることになる。

しかし銅鐸は本来、穀倉にあって稻魂を守るべき任務をもっていたとすれば、それをわざわざ土中に埋納してしまうという行為は、理解しがたいことのように思えるかもしれない。しかし埋納すれば、いうまでもなく銅鐸はその場所にありつづける。出土後、発見者や研究者によって復原された埋納の状態をみると、銅鐸は横倒しに、そしてしばしば鑄を上下にして寝かされていたり〔摂津・神戸市桜ヶ丘、同・箕面市如意ヶ谷、河内・羽曳野市西浦(笠井編1980)、和泉・堺市浜寺(島田1928)、三河・宝飯郡伊奈、同・渥美郡堀山田、遠江・引佐郡猪久保(平野・向坂1965)など多数〕、

銅鐸の時代

はなはだしきは倒立されており〔播磨・神戸市投上（直良・直良 1929），同・宍粟郡閤賀（直良 1928），阿波・徳島市源田（三木 1950），備前・岡山市百枝月Ⅱ（近藤・根木 1973）〕，正立されていた例は石見・浜田市上府（直良 1932）とつい最近発見された丹波・氷上郡野々間遺跡以外にはまったく発見されていない。

こうした事実は，銅鐸の本来の使用・保管状態の否定おそらく奉献の意味を表わそうとしているようにとれる。銅鐸が丘陵の尾根上つまり境界線上ではなく，その少し手前に埋納されていることも，この際注意されてよい。

これは，共同体に深刻な事態をもたらしている邪霊の侵入口たる地境や出現した土地の霊に対して，共同体にとってもっとも大切な豊饒の呪器ひいては象徴を供犠することによって，おそらく未来永劫までの宥和を請願したことを意味しているのではないだろうか。したがって，埋納は当然，廃棄や放置とはまったく異なる積極的な意義

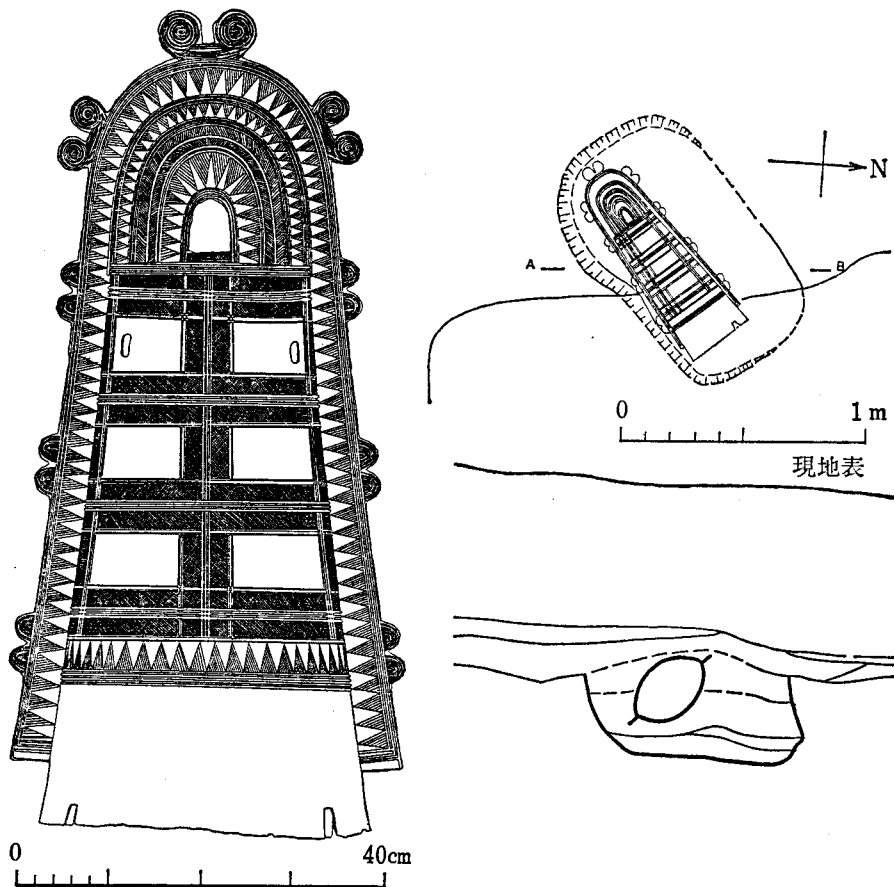
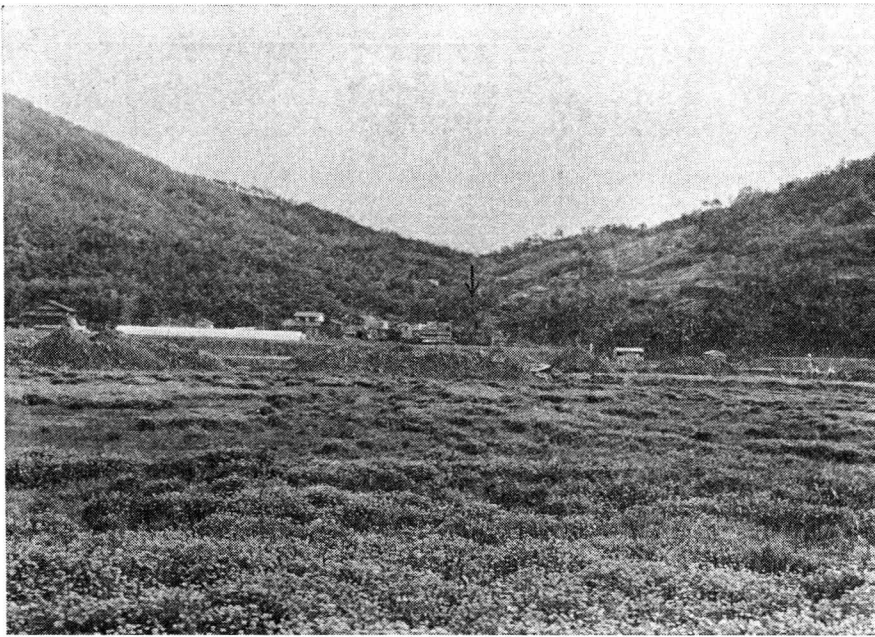
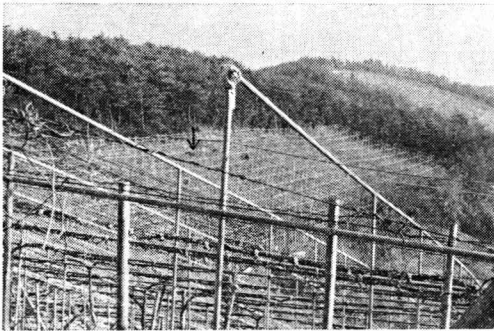


図4 河内・西浦銅鐸（突線鈕4式）とその出土状態（笠井編 1979）



備前・兼基遺跡



備前・百枝月遺跡



阿波・源田遺跡

図5 銅鐸出土地の景観（矢印が出土地点）

銅鐸の時代

をもつものであって、埋納後も一定期間はその役割を果たすことが期待されていたのであろう。このように考えるならば、銅鐸埋納の主たる季節も、稻魂が水田にあって危機にさらされる機会の多い春から秋までの間ということになるだろう。

6 銅鐸の破碎

埋納と明らかに区別して考えなければならない行為が、銅鐸の破碎である。現在まで銅鐸が集落址等から破片となって出土しているのは、次の15例である。

- 1 但馬・城崎郡日高町久田谷 突線鈕5式・片面
- 2 播磨・宍粟郡千種町岩野辺穴尾 突線鈕式・鈕部
- 3 讃岐・大川郡寒川町森弘 扁平鈕式・身部
- 4 摂津・豊中市利倉 突線鈕3式・鰭部飾耳
- 5 河内・八尾市亀井 扁平鈕式・鈕部
- 6 "・"・" 突線鈕3～5式・鰭部
- 7 和泉・和泉市池上 突線鈕4～5式・身部
- 8 "・"・" 突線鈕4～5式・"
- 9 大和・桜井市纏向 突線鈕3～5式・鈕部飾耳
- 10 紀伊・新宮市神倉神社 突線鈕4式・鈕・身・鰭
- 11 尾張・西春日井郡朝日 突線鈕5式・鈕部飾耳
- 12 "・"・" 突線鈕3～5式・鈕部飾耳
- 13 三河・豊橋市瓜郷 ? ・身部
- 14 駿河・沼津市藤井原 突線鈕4～5式・鈕部飾耳
- 15 信濃・松本市宮淵 突線鈕3式(三遠式)・鈕部

ただし、上記のうち4・9・11・12・14の例は飾耳部であるので、使用中の欠損品の可能性も考慮しなければならないだろう。正式の学術発掘によって得られたものではないという問題がつきまとうが、埋納されているばあいでも、一部の飾耳が欠損している例は少なくないからである。それはともかく、1・3・7・8のような身部破片の例からして、銅鐸のなかに破碎された例が含まれていることは確かである。

それでは、なぜ銅鐸は、ある時は埋納され、ある時は破碎されたのであろうか。破碎に対置されるのが埋納であり、それに先述のように積極的な意味を認める以上、破碎は銅鐸の機能そのものの破壊であり否定であったことは明らかである。

それについての一つの解釈はこうである。稲の不成育・不稔熟は稻魂の逃亡を意味する。だから、銅鐸の役割が稻魂の守護にあるとすれば、銅鐸はその責務を果たすこ

とができなかった罪を問われ、すでにその機能を喪失したものとして破壊措置がとられた、と。つまり、「持衰」殺しと共通の発想基盤にたつと考えるのである。ただ、そのように主張するためには、破壊例がもっと沢山あってもよさそうにも思える。

そこで出てくる次の解釈は、破壊の主体者を他集団に求めることである。弥生時代中・後期に集団間の闘争が頻発したことは、石製武器の発達、高地集落の形成、さらには『魏志』倭人伝の記述等により明らかであるが、その際に敵集団の豊饒の象徴たる呪器を奪ったり破壊することがあったと考えるのである。中・後期にしばしばみられる火災住居例を戦火によるものだとする説に賛意を表するならば、その可能性もありそうにみえるが、といってもそれはまだ状況証拠にとどまっているにすぎず特別な根拠とはなり得ないといわざるをえないであろう。

そこで第三の説は、破碎された銅鐸の状況に注目して提出される。久田谷鐸は単に破碎されたといった状態でなく、5～10cm大の小破片になるまで壊れ、「破片の中には著しく歪んだものや亀裂の入ったものが多く自然に壊れた可能性は少ない」（日高町史編集委 1980：123）こと、破片は117片出土しているがそれでも全体の3分の1ないし4分の1にとどまること、破片は「多数密着して重なりあい、ひとかたまりとなって」出土したことなどきわめて特徴的なあり方を示している。

池上鐸も、1片は5cm大の身部破片で「衝撃を受けねじれが見られ」、他の1片も「衝撃痕は見られない」がやはり身部の小破片であった。

そこで水野正好氏（1978）は、「この地で再度青銅製品を鑄造するアトリエがあり素材として集積保管されている場合や、この遺跡で各片を切断したり磨き他の形に加工する場合」、さらには「破碎した銅鐸を集め、それを切断し方形に形をととのえ、畿内などに運搬し、のち新しい青銅製品を鑄造する」場合などを想定する。

水野氏は、阿波・麻植郡牛島鐸のような袈裟襷文間の区画内が打ち抜かれている例も想起し、それらの中には当時のものが含まれていることを予想し、「折損には儀礼的な性格も配慮しなければならない」、と結論は保留している。そこで、以下、氏の想定された場合を参考にしながら私見を略述しておくことにする。

まず、注意すべきは、銅鐸の破碎例は銅鐸の変遷史の最後を飾る突線鈕式の例が圧

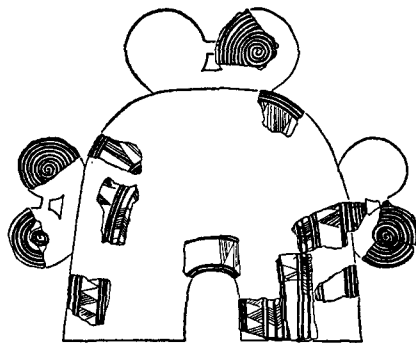


図6 久田谷遺跡出土の銅鐸破片の一部
（日高町史編集委 1980）

倒的に多いという事実である。これはやはり、先に想定した少なくとも第一のばあいでないことを証明していると思われる。次に、単に破碎されているという状態ではなく、破碎後一定の形状にそろえようとする意図がうかがわれることは、第一や第二のばあいではなく、破碎後の再利用を予定していることを思わせる。そこで筆者は、銅鐸祭祀の終焉時には、地上にのこされていた銅鐸は、むしろ積極的に破碎されて他の器物に改鑄されていった可能性も考えておきたい（春成 1982a）。

II 銅鐸の使用された社会

1 銅鐸の保有単位

銅鐸が事あるごとに次から次へと埋納された、と私のように考えるならば、ある一時点に地上に実在し使用されていた銅鐸の数量は、未発見のものを考慮にいれなければ当然、著しく少ないことになる。ましてや、2個1組で使用されていたことをも想定するとすれば、なおさらである。

いま、銅鐸は近畿地方のいくつかの集団によって鑄造されたのち、地方に移出され、その行先の集団で使用され祭祀が行なわれた、つまり地方の集団が祭祀の主体者として行動したのち埋納されたと仮定して考えてみよう。そのばあいは、各型式がほぼ一そろい出土した範囲をもって一祭祀単位と想定することができるかもしれない。このばあいは、図9のようにそれは、備前とか備中、あるいはさらに広く吉備、阿波北部、讃岐、西摂津といったひろがりをもつ集団を考えざるをえなくなるのであって、これまで「農業共同体」程度のひろがりが見込まれていたのに比較すると、はるかに広い範囲となってしまうかねない。

その点を吉備地方をとりあげて具体的に検討してみることになろう。吉備地方出土銅鐸の最新の型式は突線鈕2式であるが、それは吉備の東端の和気郡和気と備中平野の西端にあたる吉備郡妹^すから発見されている。また、瀬戸内の海上から邑久郡の平野部への入口なり泊にあたる岡山市藤井^{あだ}安仁神社および岡山平野への入口にあたる岡山市兼基^{かねもと}の谷間から扁平鈕式鐸が出土し、ことに後者のばあいは約200mほどずつ地点を異にして計3個出土している。岡山市上足守の外縁付鈕式邪視文鐸のばあいも、中国山地からまさに総社平野への入口に位置する。

これらのあり方を総観するならば、吉備の中心部への入口に銅鐸が埋納されている傾向は否定できない。このような傾向からすれば、吉備地方は1個あるいはせいぜい

2～3個のまとまりをもち、銅鐸保有の単位となっていたかのようにもみえる。おそらく讃岐や阿波北部も吉備とほぼ同様ということになる。

しかしながら、突線鈕1式以降に製作された銅鐸は、数においてはそれ以前と比較するとはるかに少なく、分布においては明らかに偏りが認められる。したがって、銅鐸の古い型式から新しい型式までそろっていることを条件にして一つの地域を設定しようとするとうとう無理が生じる。しかも、言うまでもなく、今日知られている約400個の銅鐸のうち、98%までは偶然の発見にかかる例である。だから、今後とも発見がつつくことは明らかであって、そうであれば銅鐸の本格的な分布論を展開するためには、将来の発見数（あるいは過去に出土しながら陽の目を見なかった数）をもある程度予想し、先取的に資料化しておくことが必要となってくる。そこで一つの試みを提示したい。

これまでに発見されている銅鐸の石製鋳型約13個体分のうち、それで鋳造された銅鐸が検出できたものは2個体分3個、未出土が確実なものが6個体、検索不十分なものが5個体ある。最後者を除くと、鋳型4個体につき3個体はそれで鋳造された銅鐸は未発見ということになる。しかも、外縁付鈕式に関しては同範鐸が少なくないのである。とえあえず、これを一つの参考にすれば、石製鋳型を用いて鋳造された銅鐸の本来の数は、現在発見されている銅鐸のうち石製鋳型を用いて製作されたと推定される銅鐸の数約200～250個とはかけ離れたその4倍、約800～1,000個はあったと見積もらなければならなくなるわけである。そして、それに粘土型で鋳造された既発見・未発見の銅鐸を加えると、総数は1,000～1,500個の間にはいるのではないかと推測することもできる。

さらにまた、出土地不明の銅鐸はこれまで分布状況を論ずる際は当然のことに、資料として活用されてこなかったが、その数は40個前後に達しており、本格的に分布を論じようとするれば、決して無視できない存在である。

それでは、それぞれの地域なり地方で既発見の銅鐸数を機械的に3～4倍すればそれでよいとなると、それは疑問である。なぜなら、銅鐸の発見は、それぞれの地域の後世における土地利用の形態に大きく左右されているからであって、西摂のばあいは宅地造成、南紀や遠江のばあいは果樹園経営と密接な関係におかれているのである。以上のような点を考慮したうえで、もう一度それぞれの地域の実態を点検してみることになろう。

さて、弥生時代中期には、中心的あるいは拠点的な大集落とそれを核とする周辺の複数小集落（世帯共同体）の有機的結合が「農業共同体」の実態であるとの考えが、

銅鐸の時代

畿内なかんずく摂津や南関東の構浜市の資料等にもとづいて提示されている（都出 1979, 田中義昭・1976など）。この考え方に従うならば、たとえば西摂平野部では、弥生中期の大集落の数、さらには古墳前期4世紀代の首長墓のあり方から勘案すると、かかる共同体が10個前後存在していたことを想定できる。すなわち、西摂の丘陵部等から一首長墓系列につき平均2個（外縁付鈕式1個、扁平鈕式1個）の割合でこれまで発見されている銅鐸は、おそらくこの地方の農業共同体ごとに保有されていたものが、変事に際して埋納されたとみなして大過ないのではないと思われる。

吉備や讃岐、阿波北部の諸地方のばあいも、前期古墳の首長墓系列と対応させるかぎり、外縁付鈕式期から扁平鈕式期にかけては、これまでの発見個数と密度こそ西摂平野に及ばないが、基本的には一農業共同体につき1～2個の銅鐸が保有されていたと予見しておいたほうがむしろ無難というものであろう。

それに対して、神戸市桜ヶ丘の14個もの銅鐸に関しては別個の解釈を必要とする。先述のように、銅鐸は2個1組で使用されることが多いとすれば、桜ヶ丘の銅鐸は、本来は7～9組からなっていたのであって、それだけの数の農業共同体から集積されたことになる。小林行雄氏(1967: 234—235)は、これらの銅鐸は桜ヶ丘以西、播磨・神戸市投上以东のこれまで銅鐸が発見されていない地域（その間の距離約22km、ただし実際には約17km）にあったことを想定した。この銅鐸未発見地域では背後の丘陵上に西から得能山、二本松、夢野丸山の3基の前期古墳（円墳）が築かれているが、つい最近、楠・荒田町遺跡から銅鐸の石製鋳型かと推定される高熱をうけた小石片が検出されたことによって、小林氏の想定も現実味を帯びるにいたったといえるが、それにしても、この地域の前期古墳の築造状況からすると、桜ヶ丘銅鐸群を桜ヶ丘以西にあったもののみと限定する必要は必ずしもないと思われる。桜ヶ丘が西摂の銅鐸の集中分布の西端に位置している点を重視すれば、その多くはむしろ桜ヶ丘以东にあった可能性も考えられるのである。すなわち、1～2個単位で銅鐸を埋納している西摂、あるいは東奈良の鑄造集団を擁し多量の銅鐸を生産しているにもかかわらず既往発見銅鐸が外式1個、突2式1個、突4式1個にすぎない北摂津まで包みこんだ同じ共同体群がある時には保有する銅鐸2～1個を1個所にもちよって祭祀を行なったのち、桜ヶ丘の地に一括埋納したと考えることもできるのである。こうした二つの埋納のあり方のちがいは、埋納を必要とした対象のちがひ、あるいは対象の規模のちがひに由来しているのであって、前者が個々の共同体の利害関係と密接につながっていることが多かったのに対して、後者のばあいは、多数の共同体の利害にかかわる性格を有していたということではなかろうか。

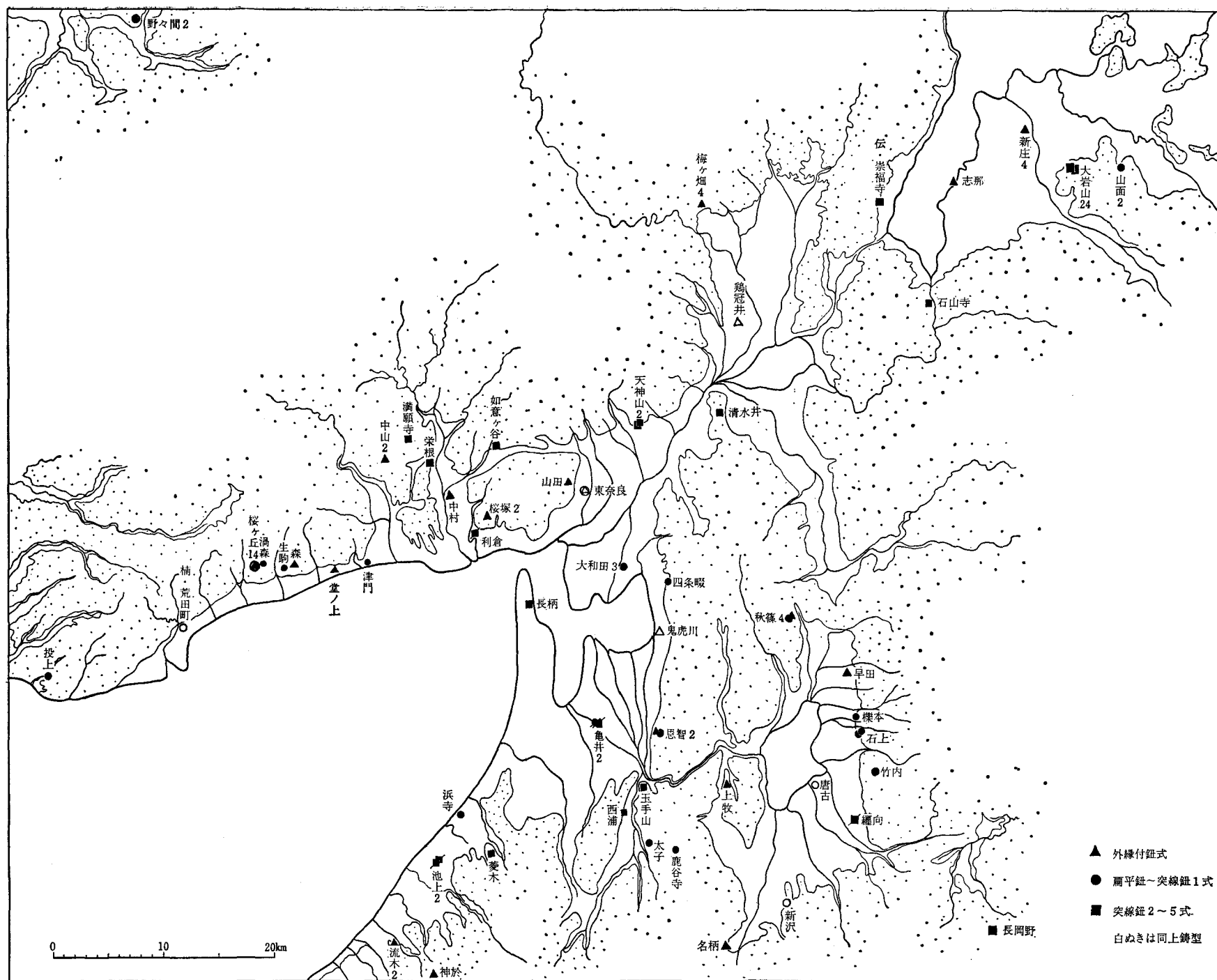


図7 畿内中枢部における銅鐸および銅鐸鋳型の分布図（数字は個数を示し、1個の場合は表示していない。／は破片）

したがって、個々の銅鐸の最終的な埋納がいかなる状況のもとで行なわれるにせよ、銅鐸が安置されている高倉の数が限られていたことは、将来に予想される発見を考慮したとしても確かである。ここでは、「農業共同体」―「世帯共同体」の関係でいうならば、1個の農業共同体に編成される諸世帯共同体の初穂は、拠点的な集落内に付置された高倉1個所に集められ、あるいは中核となる世帯共同体の初穂だけはそれに宿る稲魂が1組の銅鐸によって守護されていたと理解し、後考にまつことにしたい。

2 銅鐸の鑄造地域

銅鐸の鑄型は、現在までのところ次の諸遺跡から出土している。

- 1 大和・磯城郡田原本町唐古 石型1個体分（扁式，流水文），粘土型数個体分
- 2 大和・橿原市一町新沢 粘土型1
- 3 河内・東大阪市弥生町鬼虎川 石型1（外式，4区？袈裟襷文）
- 4 摂津・茨木市東奈良 石型7（外式 流水文5，外式 袈裟襷文1，扁式1）
- 5 摂津・神戸市兵庫区楠・荒田町 石型1
- 6 播磨・姫路市名古山 石型1（扁式，4区袈？）
- 7 播磨・姫路市今宿丁田（扁式，4区袈？）
- 8 播磨・赤穂市上高野 石型1（扁式，6区袈？）
- 9 肥前・鳥栖市柚比町安永田 石型1（外式，横帯文）

以上のうち、東奈良2号鑄型によって製作された外式2区流水文銅鐸は、摂津・豊中市桜塚および讃岐・善通寺市我拝師山から、同じく東奈良3号鑄型による外1式4区流水文鐸は、但馬・豊岡市気比（3号鐸）から発見されており、畿内で鑄造された銅鐸が讃岐や但馬の地まで運搬されたことは明らかである。

ところで、これらの遺跡から出土した石範の材料は、鬼虎川、今宿丁田、安永田例をのぞくと、いずれも神戸層群中に含まれている凝灰質砂岩であると鑑定されている。神戸層群は、兵庫県の東・北は三田市、西は小野市、南は神戸市の東西南北約25kmの範囲内に分布しているにすぎない（藤沢 1976）から、この地域から東奈良や唐古へ石材が搬出されたことになる。

問題は、播磨地方出土例の評価であろう。そのうち、今宿丁田例については、フイゴの羽口も出土しているので、付近で鑄造されたと考えてもよいであろう。上高野例は、1910年代に千種川の河原で採集されたもので、存在状況はまったく不明である。上高野の鑄型による製品は未発見であるが、鈕の文様でもっとも類似する例は、神戸

銅鐸の時代

市桜ヶ丘 6 号鐸である点に大きな問題が含まれている。しかも、姫路市から赤穂市の付近は、現状では銅鐸の分布密度は稀薄な地域なのである（もっとも、東奈良や唐古のばあいも同様であって、付近発見の銅鐸の数は決して多くはない）。しかし、たとえば摂津付近の鋳型の廃品を播磨へ運搬した可能性を考えるのも不自然の感を免れないから、以下の論は播磨でも銅鐸が製作されたと仮定した上で進めていくことにしたい。

銅鐸の鋳造が、高熱加工技術の点において容易な技でないことは明らかである。さらに、青銅の原材が輸入品であれ、あるいは「倭国」内での原鉱からの製錬であれ、入手自体が困難事であったことはいうまでもない。ましてや、銅鐸の聖なる用途からすれば、青銅を自由に駆使して製作するには、技術に加えて特別な魔術が必要とされたであろうことも推定に難くない。東奈良や唐古遺跡の発掘調査によって、銅鐸の製造工程も衆目にさらされそうな状況になってきているけれども、その鋳造は実は秘密裡に行なわれたのではあるまいか。原材の入手難という問題に加えてこのことが鋳造地を局限する結果を生んだのではないか、と私は疑うのである。

青銅器の鋳造には、特殊な材料と高度の技術を必要とするところから、専門工人の巡回がありえたことは予想されているところである（佐原 1960 a : 99, 1981 : 1）が、上高野例はこのことを物語っているのであろうか。とするならば、上高野鋳型と桜ヶ丘 6 号鐸との類似は、例えば摂津から播磨への工人の一時的移動を示唆しているのかもしれない。もっともそれならば、摂津において鋳造し製品だけを運搬すればすむことのように思われるが、それは銅鐸そのものの性格に由来するところもあるのかもしれない。たとえば、非常時の特別な祭祀に先だってすぐ近くの場所で新鋳し、ただちに埋納されねばならなかった事情が介在したと考えることもできよう。上高野が播磨すなわち近畿の西端に位置し、しかも付近に拠点的な弥生集落址が埋没しているようには必ずしもみえない点も暗示的ではある。

名古屋の鋳型は、扁平鈕式 4 区袈裟襷文で高さ 30cm 前後の鐸を製作したものと推定されているが、この型式の銅鐸は石見 1、伯耆 3、備後 1、備前 4、讃岐 1、阿波 8、紀伊 1、北河内 2 など計 26 個以上発見されているいっぽう、因幡、但馬、摂津、中南河内、大和、和泉からこれまでまったく出土していず、分布が西に偏っていることも、消極的ながら播磨産であることを指示しているように思われる。

上記を一例として、約 400 個の銅鐸は、同範でなくとも各時期ごとにいくつかの群に分けることが可能である。そのいくつかを例示するならば、外縁付鈕式においては、2～4 区流水文で高さ 43cm 前後のものが 23 個以上出土し、そのうちの 1 個は摂津・

東奈良3号鋳型で鑄造されているので、その多くは摂津産の可能性が考えられる。この型式の銅鐸が、讃岐・阿波・伯耆・因幡・但馬などから発見されているいっぽう、播磨・吉備・紀伊などから未出土というあり方も、製作地が限られていたことを暗示する。

扁平鈕式については、高さ42cm前後の6区袈裟襷文鐸が39個以上出土している。かつて「定型文式」鐸の模式とされたようにもっとも画一性をそなえており、特定の地域の工房で製作されたと考えるべきであろう。分布も西は石見・備中・讃岐・阿波・土佐から東は摂津・河内・大和・伊勢・紀伊までひろがりを持ち、上記の流水文鐸の分布とは摂津・河内・大和では重なりつつも他の地方では重ならないので、東奈良とはちがうがやはり摂津西部付近で製作されたように推定される。

上に挙げた3例は同型式でもっとも出土数の多い例であるが、これら以外も基本的に群別できることは、つとに指摘されているとおりであって(佐原 1964)、製作工房なり地域色の反映であることは容易に予想できるところであろう。

ただし、1遺跡から2点以上の型式名のわかる銅鐸鋳型を出土した唯一の例である摂津・東奈良遺跡では、流水文鐸鋳型と斜格子袈裟襷文鐸鋳型の両者が共存しており、その割合は、確実なところでは5対1であった。しかも、流水文鐸と分類された完形の1号鋳型のばあいには、渦文からなる2本の縦横帯で鐸面を4区分し、その内部に流水文を充填しており、袈裟襷文と流水文の一種の融合現象が認められる。しかしながら、東奈良遺跡では、資料の総体からすると外縁付鈕式の古い段階には、もっぱら流水文鐸が製作されていたようにみえる。そして、同遺跡出土の扁平鈕式鐸鋳型(身の上端に斜格子文横帯があるが、それ以下を欠いているため袈裟襷文が流水文かは不明)の鈕の外縁部を飾る鋸歯文が通例とは逆に外向するというクセが、同遺跡から西方へ約1km離れた吹田市山田センブから出土した4区袈裟襷文鐸と共通するところから、同鐸を東奈良産とみなすならば、それは外縁付鈕2式に属するので、東奈良最古の流水文鐸よりは一時期くだることになる。すなわち、東奈良遺跡においては、外縁付鈕1式の段階においては流水文鐸のみがつくられ、そののち同2式の時期にいたって袈裟襷文鐸も製作されるようになったと考えることができる。

佐原眞氏は、流水文銅鐸の発生地は土器・木器等に流水文を最初に施した大和・河内地方のどこかであると主張しているが、大和・唐古遺跡出土の扁平鈕式と推定される唯一の石製鋳型が、推定高約80cm位とされる大形鐸には珍しい流水文で飾られているという事実を、発祥地にふさわしい古くからの伝統とみなすこともできるかもしれない。そして、大和ないし河内産の最古の流水文鐸として、越前・井向1号鐸^{いのむか}や伝

銅鐸の時代

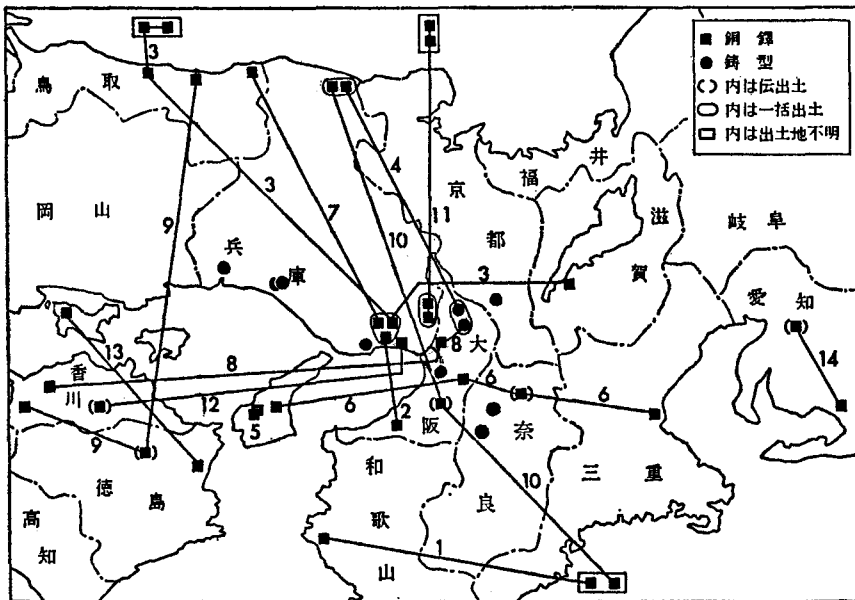
江・引佐郡井伊谷^{いゑたに}鐸を指定するならば、大和または河内におくれて鑄造をはじめながら当初は流水文鐸のみを製作していた東奈良遺跡も、袈裟襷文鐸の発生地候補としてはあまり適当ではないかもしれない。

それというのも、袈裟襷文鐸の最古の例は、越前・坂井郡井向2号鐸で菱環鈕式の時期までさかのぼるからである。それに次ぐ古さを与えられるのが、大和・北葛城郡上牧や三河・豊川市千両^{ちもろ}出土の外縁付鈕1式鐸であり、さらに若干くだるかと推定されるのが、摂津・宝塚市中山、伝摂津・神戸市大月山など出土の同範4鐸であって、いずれも4区袈裟襷文である。すなわち、それは横帯文鐸の身の中央および両端に計3本の縦帯を付加することによって容易に創出される文様であった。それらのうち、後出的な摂津・中山鐸等は全体の形状・大きさ等が桜ヶ丘1号・2号鐸等の流水文鐸と類似していることが注意される。袈裟襷文鐸と流水文鐸の一括埋納例はすでに、越前・坂井郡井向遺跡において知られているところである——もっとも一括された時期は判明しないが——が、おそらくこの時期には工人集団間の交流が活発化しつつあったことを示唆しているのであろう。神戸市楠・荒田町から銅鐸の鑄型の破片かと推定される石片が検出されているように、銅鐸の鑄造地は畿内各地に次第に増加していったのである。

ところで、播磨の姫路市名古山・今宿丁田の両遺跡から出土した鑄型はともに袈裟襷文鐸のそれであり、鈕部分だけ遺存の赤穂市上高野鑄型も摂津・桜ヶ丘6号鐸の鈕部文様構成にきわめて近い点から判断すると、袈裟襷文鐸の可能性がつよい。土器面の流水文が畿内からの影響としてわずかに見出されるにすぎない播磨で、袈裟襷文鐸の鑄型だけが発見されているのはむしろ自然であろうが、播磨では現状では扁平鈕式期の鑄型しか発見されていないので、袈裟襷文鐸の発祥の地に擬定するのは困難であろう。

その点では、河内の鬼虎川遺跡から外縁付鈕2式4区袈裟襷文と推定される銅鐸鑄型の破片が発掘されていることは、袈裟襷文鐸の発生地が河内から摂津地方であったことを示唆しているのかもしれない。

いずれにせよ、銅鐸の鑄造地の数は今後とも増加していくであろうが、それにしても畿内や東海の特定の農業共同体だけがその製作にかかわっていたこと、また、銅鐸の細かな特徴が鑄造集団のちがいを反映していることなどを予想した上で、銅鐸の配布のメカニズムを解明していく作業が必要であろう。



- 1 御坊市朝日一出土地不明(外・横)
 - 2 神戸市桜ヶ丘2号一岸和田市神於(外・流)
 - 3 守山市新庄1号一神戸市桜ヶ丘1号一東伯郡泊村池ノ谷一出土地不明2個
(外・流)
 - 4 茨木市東奈良3号銅型一豊岡市気比3号(外・流)
 - 5 西淡町慶野中ノ御堂一西淡町慶野上ノ御堂(外・袈)
 - 6 津市神戸一伝奈良県一八尾市恩知垣内山一緑町倭文(外・流)
 - 7 神戸市桜ヶ丘3号一岩美郡岩美町上屋敷(外・流)
 - 8 茨木市東奈良2号銅型一豊中市桜塚1号一善通寺市俄拝師山(外・流)
 - 9 鳥取市越路一伝徳島県一観音寺市豊田(外・流)
 - 10 豊岡市気比4号一伝堺市陶器一土地不明(外・流)
 - 11 宝塚市中山1号一宝塚市中山2号一土地不明2個(外・袈)
 - 12 神戸市森一伝香川(外・袈)
 - 13 倉敷市種松山一徳島市安都真7号(扁・袈)
 - 14 宝飯郡御津町広石一伝愛知郡(扁・流)
- (外=外縁付鈕式、扁=扁平鈕式、横=横帯文、流=流水文、袈=袈裟摺文)

(田中琢 1977: 図7から作成)

図8 同範銅鐸の分布(後藤直 1978, 一部改変)

3 銅鐸の配布

銅鐸は、畿内、時に尾張から諸地方の農業共同体に配布・使用されたとするならば、その配布はいかにして行なわれ、配布——被配布集団間にいかなる関係をもたらしたのであろうか。さらにまた、何ゆえに銅鐸祭祀はかくも広範に普及しえたのであろうか。

稻魂信仰が水稻耕作とともに日本にはいつてきた思想のうち、もっとも根底をなすものであったとすれば、水稻耕作のあるところには必らず稻魂の信仰と何らかの形で祭祀が行なわれ、しかもその発展の必然性が与えられていた、と考えることはおそらくまちがっていないであろう。すなわち、銅鐸祭祀の開始の時期を弥生前期末までさかのぼらせるにせよ、中期までくだらせて考えるにせよ、それが発生・普及する以前の社会においても、装飾された壺形土器や高坏形土器の存在を根拠に、稻魂の信仰と祭祀は、素朴な形で実在したと考えたい。かかる基盤の上に、銅鐸はそれを用いる稻魂祭祀形式と一体のものとして創出され普及するのであって、その結果、各共同体とも共通の呪器、共通の宗教的表象を媒介することによって稻魂信仰は一層画一的な内容をもつにいたるのである。

さて、銅鐸の配布というばあい、やはり何らかの見返り物資があったと考えるのはむしろ普通であろう。それを考察するうえで、地域も物もまったく異なり直結できる性質のものではないが、苗族において、銅鼓の「鼓声の宏き者を上と為して千牛に易う可し。次者は七、八百なり。鼓二、三を得れば便ち王を僭号すべし」、という『明史』巻212 劉顕伝の記録は一つの参考となろう。

日本の銅鐸のばあいも、稻魂を守り豊饒と繁栄をもたらす機能を具備する点から推して、大変な価値を有していたことは疑いない。では見返りの物資として何が考えられるのか。銅鐸が分布している近畿、中・四国、東海地方の弥生中・後期において流通した物資として挙げられるのは、中期ならば石器の材料として安山岩、結晶片岩、粘板岩など、後期ならば塩、全期間を通しては鉄または鉄器、玉製品、ガラス製品、布帛、丹、その他特産物、そして稻米などであろうが、それではたして銅鐸がこれらの物資と交換されたのであろうか。これらは、大きく日常生活に供される「生存財」と貴重品・奢侈品からなる「威信財」とに区分される(ゴドリエ 1976: 187)。銅鐸は一般的には後者のカテゴリーに含まれるであろうが、一方においては日常生活に密着するいわば実用品と信じられていた点においては単なる貴重品や奢侈品とは明らかに一線を画す、という独特の性格をもつ。とはいえ、それが流通する過程において

は、貴重財と同様の交換価値をもつことはありえたであろう。

銅鐸が各地の特産物資とくに生存に必要な財と直接的・等価的交換品となることが容易ではなかったとすれば、単純な交換という形式で銅鐸を入手する道は広く開かれていたとはいえないことになる。にもかかわらず、諸地方に銅鐸は分布している。したがって、等価の何らかの代償物を用意して交換したばあいもあったかもしれないが、銅鐸の呪的機能からしても一般にはむしろ、製作集団の呪的優位性や宗教的権威を承認し、むしろ不等価の特産物や生口などを献上するという形式をとって配布をうけたことのほうが多かったのではなかろうか。あるいは、製作共同体にとっては意図的に余分に作った銅鐸は他共同体に対しては当初から衒示的性格を具備した交換物としての社会的機能を客観的かつ潜在的にもつものであったから、みずから、これはという集団に対して率先して配布し、それに対して被配布集団が何らかの返礼を義務づけられるという形式をとったとしても同じことである。

要するに、「聞く銅鐸」の配布は、配布集団側を上位とし被配布集団側を下位とする贈答形式を原則としており、対等の交換形式をとっていなかった、すなわち銅鐸と等価値になりうるものは精神的なものであり、それを突破口として新たな経済的な関係がつくられた、と私は考える。銅鐸の配布が製作共同体の威信を高める役割を果たす点にも、私は目を向けざるをえないのである。ただ、付言しておくならば、実際問題としては、銅鐸は単なる宝器とか財物にとどまるものではなく、呪的機能したがって生産的機能をもつと信じられている「実用」の器物である。そうであれば、その配布は、他方において、呪器と祭祀体系を共有する関係を創出することになるのであるから、衒示的側面のみを強調することは避けなければならないであろう。同じことは、鑄造集団と被配布集団との間の交通が首長を介して行なわれたとしても言えることである。

ところで、今一つの問題は、紀伊南部・阿波南部・土佐東部・近江・遠江などの諸地方から重点的に出土する「見る銅鐸」のばあいである。とくに、紀伊南部や阿波南部のように、狭隘な平野部しかもたない地域から畿内産の多量の銅鐸が集中出土するばあいも、上のように考えてよいのかとなると疑問なしとしない。これらの地方は畿内の外縁部に位置し、可耕地の狭い、またのちに有力な前期古墳が築かれていない、総じて弥生・古墳時代の後進地方とみなさざるをえないという点に加えて、出土する銅鐸は突縁鈕2式以降の「見る銅鐸」が圧倒的に多いという点も共通する大きな特徴となっている。三遠式銅鐸の鑄造地を濃尾平野に求めるならば、それが集中する静岡県引佐郡三ヶ日町から細江町の平野部のばあいも同様である。しかし、これらの地域

銅鐸の時代

にも、遠江をのぞけば、「聞く銅鐸」がまったくないというわけではなく、少ないながらも発見されているのである。だから、それらの「聞く銅鐸」に関しては、他地方と同じく、地方の農業共同体が保有単位であったと考えてさしつかえないばかりもあるが、ここでは「見る銅鐸」にきわだつ特徴がそれ以前にまでさかのぼって認められる例も含まれている可能性もあることを指摘しておきたい。しかし、全体としてみれば新たに埋納された突線鈕2式以降の保有単位をそれ以前と区別して、別個に考察してみることが必要であろう。

なぜなら、突線鈕2式以降の銅鐸の分布の大勢はそれ以前と明らかに異なるからである。農耕生産力の低い地域に分布は偏っており、地域の特産物を別とすれば、はたして贈与という形をとって銅鐸がもたらされたかという点がはなはだ疑問なばかりが少ないのである。先の論理からすると、地方に埋納されている銅鐸に関しても、鑄造集団である畿内の集団が関与して行なった祭祀の遺産であった、とするもう一つの仮説を用意せざるをえなくなる所以である。

ただし、紀伊南部にせよ、土佐東部にせよ、人間集団が農耕とおそらく漁撈を生活の糧とする定住生活をおくっていたことは確かである。しかも、紀南のばかりは弥生中・後期に属する高地集落址を少なからずのこしており、この時期に列島社会をおおった争乱とも無縁ではなかったことを物語っているのである。したがって、畿内集団が祭祀の主宰者であったとしても、これらの在地の集団とまったく無関係に祭祀が催されたとは考えにくいであろう。

紀南の銅鐸の出土地を見ても、たとえば海岸に面した例が多いといった特徴はまったく認められない。代表的な南部川流域のばかりも、狭い平野をとりかこむ縁辺の丘陵6～7個所から「見る銅鐸」が発見されており、山塊と平野の境界に埋納されるという他地方における「聞く銅鐸」埋納の原則はやはりこの地域においても貫徹されているのであって、その地域においていわば完結したあり方を示しているのである。したがって、紀南の銅鐸出土地は、畿内の南の境界地に位置すると同時に、それぞれの小平野地域の境界に相当するという二重の意義を担っているといえよう。問題は、これらの銅鐸が常時、紀南の諸集団によって保有され、特別時に付近の丘陵上に埋納されたとみるべきか、それとも、埋納直前までは畿内中枢部の特定集団のもとに保有されており、埋納を伴う祭祀の際に紀南まで運搬されてきたとみるべきか、ということであろう。

前者のばかりおきてくる疑問は、はたして紀南の小集団が鑄造地の畿内中枢部からさえ少数しか出土しない貴重な銅鐸をいかにして入手しえたのか、であるが、紀南の

小集団の独立性を強調するならば、明快な解答をひきだすことは困難であるように思われる。そうではなく、畿内の南の境界という点が、畿内中枢部の諸集団にとって強く意識されていたとすれば、境界を呪的にも守護するという意味で祭祀の場において

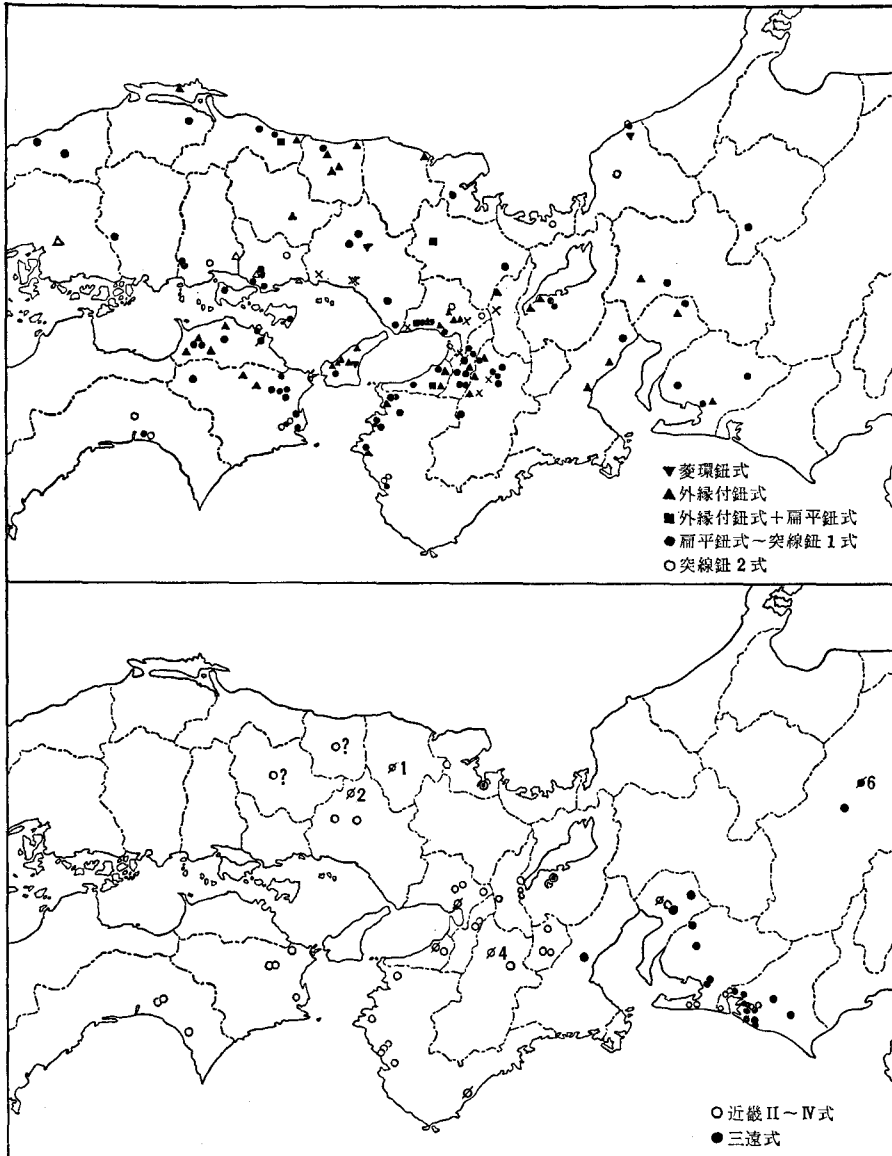


図 9 菱環鈕式～突線鈕 2 式銅鐸の分布図（上）と突線鈕 3～5 式銅鐸の分布図（下）
（印のうちの／は破片となった銅鐸，×は銅鐸鑄型出土地，1 久田谷，2 岩野
辺，3 池上，4 纏向，5 大岩山，6 宮淵）

銅鐸の時代

も重要視されることはありえないことではないだろう。とくに、前方後円墳が各地に出現するにいたるまでの弥生後期の政治情勢のもとでは、かかる意識は増幅されるのではないであろうか。

上記のように、銅鐸の「配布」を二様に理解したとしても、畿内を中心に時期的に伸縮はあるにせよ、中・四国東半部から北陸、時には東海までの範囲におよぶ、農耕にかかわる中心的な祭祀形式、したがってイデオロギーを共有する広大なまとまりが、すでに弥生時代中・後期に形成されつつあったことがうかがわれるのである。

III 銅鐸の終焉

1 「聞く銅鐸」の消滅

銅鐸の鑄造は弥生時代終末までには終了し、そして古墳時代初頭までにはついに地上から姿を消すと信じられている。

銅鐸祭祀の廃絶について近藤義郎氏(1966: 457)は、「共同体の成員を一つにむすびつけていた祭祀における呪的媒体が、司祭権を支配の手段として自己の掌下におさめた首長の神性のもとに、不要物と化したことをしめす」、「古墳は、祭祀における靈力をわがものとすることによって神性を付与された首長に対する質をかえての集団祭祀の産物であった」、と評価し、首長霊祭祀の成立が銅鐸祭祀を止揚したとの展望を与えている。ここでは、銅鐸の消滅と古墳の出現はほぼ同時のことと前提されているわけである。

同じことは、桜ヶ丘や大岩山における銅鐸の集積埋納を祭祀圏の統合とみなし、「ムラ」から「クニ」への発展を想定する小林行雄氏(1967: 232—235)の所論についても指摘できる。

近年、銅鐸は菱環鈕式から突線鈕1式までの段階と、突線鈕2式から5式までのいちじるしく大形化した段階とに区分されて考察されることが多くなった。すなわち、鳴らして「聞く銅鐸」から鳴らさず「見る銅鐸」への変化が問題視されるにいたった。しかしながら、両者の分布をみるとそれはくいちがっており、一つの地域において継起的におこった変化であるとはいいたいように思われる。そこには、銅鐸埋納の性格変化の問題、さらには銅鐸の保有者の変化の問題が横たわっているように看取されるのであって、銅鐸の廃絶についても両者は分けて考察すべきであると考えられる。

まず、「聞く銅鐸」の廃絶の問題からはいっていこう。第一の問題は、すでにふれ

た廃絶の時期である。たしかに扁平鈕式鐸のなかには、古く伯耆・東伯郡米里鐸のように小形丸底甕を伴っていたらしいという報告（清野 1928, 直良 1929）があり、時としては約 200 年間にわたる伝世を認めざるをえないようなケースがあるとしても、諸地方に配布されていた「聞く銅鐸」の多くは、むしろ弥生中期末ないしは後期初までにはつぎつぎと埋納され、地上からその姿を消していたと推定される。その一方、次の「見る銅鐸」は基本的に配布を目的として製作されたものではなかったから、生産地からの新たな供給を絶たれた弥生後期の諸地方の農業共同体の高倉には銅鐸の姿を見出すことは困難であったろう。それでは、後期には農業共同体レベルでは青銅製の呪器・祭器の類は存在しなかったのであろうか。

ここであらためて想起されるのが、前期古墳出土の漢中期の鏡を弥生時代以来の伝世品であるとみなす小林行雄氏（1959：49—63, 1961：137—159, 1965：15—97）の所説であろう。すなわち、鏡の伝世は、「神の保護をうけつぎ、神の祭りを継ぎつたえるということ」であり、「神威を顕わすための宝器の管理は、司祭的首長の責任でもあり、また、かれの地位の保証でもあった」、と考えるのである。

その後、川西宏幸氏（1975）は、銅鐸の諸型式と漢中期の鏡の分布状態とを重ねあわせてみる作業を行なった結果、「方格規矩鏡の入手時期が、外縁付鈕式鐸の分布の形成時期にあり、内行花文鏡の入手時期が、扁平鈕式の分布の形成時期にある」とする一方、外縁付鈕式鐸は中期前半には埋蔵され、扁平鈕式鐸は中期後半には埋蔵された、と推定する。そして、その間の関係について、「古式鐸と漢中期の鏡が、一地域内において、あいられない性格をもつものであるとするなら、鏡の入手による影響のひとつとして、古式鐸の埋蔵がうながされ、銅鐸のもつ意味は忘れられていった」と推論する。そして、「銅鐸を失なって鏡を有する地域と、新式鐸を有する地域とが、遅くとも後期には併存していた」、と論を進めるわけである。

筆者はすでに述べたように、「新式鐸」すなわち「見る銅鐸」についての評価は異にするが、後期には「聞く銅鐸」はすでになく鏡がそれにとってかわっていたとする想定は、傾聴に値する意見であると考えたい。

特に、銅鐸がその形骸をとどめながらも、農業共同体レベルの呪器ではなくなり、より上位の社会集団に帰属する呪器に変化しているのは、逆にいえば、地方の農業共同体の側がそれを必要としなくなっていたことと表裏の関係にあるわけであるが、といっても稲魂を守護する何らかの宗教的な装置まで不要になったとは考えにくい。しかも、古墳被葬者に体现されるような首長が出現するまでには、まだ時間があるのだ。したがって、その間、首長なり司祭者の姿はまだ表面には見えないけれども、稲魂の

守護方法には何らかの変革があったことを想定しないわけにはいかないであろう。’

「伝世鏡」については、それが中国における伝世品がのちに日本に舶載されたものとみるか、それとも中国で製作されてまもなく日本へもたらされ古墳に副葬されるまでの間は日本で伝世されたとみるか、論議の分かれるところであるが、九州では漢中期の鏡が1～2世紀に入手され、他地方では3～4世紀に入手されるというのも不自然の感は免れない。とくに近年、近畿から東海地方の弥生後期の遺跡から方格規矩鏡や内行花文鏡の破片や完形品の出土例がわずかずつふえつつあることは、小林氏や川西氏の構想を裏づけするように思われる。

問題は、その鏡と稲魂信仰なり首長との関係、究極的には弥生後期の稲魂祭祀の実態の解明ということになるが、それは機会を改めて考察することにしたい(その一端については春成 1982b)。

2 「見る銅鐸」の埋納

さて、銅鐸の分布を型式ごとにみていったさいもっとも注目されるのは、突線鈕1式までは石見からも出土し、突線鈕2式までは備中・備前からも出土しているが、突線鈕3式以降になると、分布圏は確実なところでは但馬・播磨以東に狭められ、山陰側では石見・出雲・伯耆、山陽側では吉備が圏外となってしまう。四国の讃岐にいたっては、扁平鈕式までは12個以上出土しているが、突線鈕1式以降の型式はまったく見られない。

これをそれぞれの地域における土器型式の変遷ならびにその分布状況と対比させるならば、第IV様式までの広範な斉一性を破って成立する畿内の第V様式、山陰の九重式、吉備の上東式など弥生後期の諸地域の状況に、突線鈕2式以降の分布状態はもっともよく合致するといえる。

そのいっぽう、「聞く銅鐸」最後の突線鈕1式鐸はその発見数はこれまでのところ12個を数えるが、そのうち畿内産といえるのは7～8個で、のこりは東海産とみなされるほどに生産量が少ない。しかし、それは過渡期的性格をもつ型式であるから特別にとりあげるまでのことはないかもしれないが、次の2式も17個で、うち畿内産は12～13個にとどまるという現状は、このころに銅鐸の生産を低下させる特別な政治情勢の変化があったことを暗示している。そこで私は、突線鈕1・2式の鑄造年代をIV様式とV様式の境界前後と比定し、「見る銅鐸」の成立と埋納は、IV様式期～V様式期初めの争乱の終息後の諸地方間の政治的關係に対応するものと考えてみたい。

その点で、「見る銅鐸」の埋納された地域が、遠江西部・近江南部・伊賀・紀伊南

部・阿波南部・土佐東部など近畿の外縁部に集中している事実は注目すべきこととなる。これらの地方は平野部がきわめて狭い点でも、やがて始まる古墳時代においては、大形の前方後円墳をまったくあるいはほとんど築いていない点でも共通しており、むしろ後進地的な性格をもっている。こうした地方に「見る銅鐸」の分布が集中するという特徴的なあり方は、「見る銅鐸」が「聞く銅鐸」とは異なる原理にもとづいて埋納されていること、そして「見る銅鐸」の鑄造地が畿内中枢部と濃尾地方であったとすれば、その埋納はあくまでも畿内の中心勢力なり東海を中心勢力の意志にかかわるものであったことを示唆する。

それでは、稻魂を結びとめる呪器として出発し、それゆえに各地の農業共同体に広範に普及しえた銅鐸が何故かかる変化をとげるにいたったのであろうか。それは次のように考えることができるのではないだろうか。

稻魂の守護は、もともと農業共同体の生活諸般の守護に通じていた。したがって、農業共同体間に共通の利害関係なり同盟関係なりが成立すると、銅鐸はそれを守護する役目をも課せられる。桜ヶ丘における銅鐸群の集積・埋納はその典型的な表現である。そうした関係が拡大され畿内中枢部を盟主とする勢力となったばあいは、銅鐸は畿内社会を守護する神器として位置づけられることになる。おそらく畿内勢力においては、自然との対立と九州・吉備・出雲・東海地方等の諸勢力との対立は、表裏一体のものとしてとらえられていたであろう。すなわち、西方での自然の脅威は、制圧下でない九州や吉備勢力の存在と結びつけてとらえられていたし、東方でのそれは対立・抗争中の東海勢力の存在が無関係ではなかったのである。したがって、畿内勢力と利害関係を共にする地方勢力も加わって、非常時には境界で祭祀が行なわれ、銅鐸が埋納されたのである。

「見る銅鐸」の保管場所を限定することは容易ではないが、考えられる一つのケースは畿内中枢部の聖所に建てられた祠である。しかし、但馬・久田谷や播磨・岩野辺からの破片の出土は、もう一つのケースを考えねばならないことを教えているように思われる。

すなわち、久田谷鐸が発見地付近で破碎された可能性がつよいと考えたばあいは、畿内の中枢部に保管されていた銅鐸をわざわざ辺境の地まで運搬し、そこでただちに破碎するという行為はいかにも不自然である。破片となった銅鐸をその場所まで運んでいくという行為についても、それがより古い時期であるならば、佐原氏(1981b)の紹介する巡回工人を示唆する例として検討の余地はあろうが、この例は突線鈕5式であるだけにやはり不自然といわなければならない。

銅鐸の時代

したがって、これらは現地に運搬されて一定の期間使用された後に破砕されたと考えたほうが妥当のように思われる。そうであれば、突線鈕式鐸が畿内から僻遠の地に設けられた祠の中に保管され祀られるといった状態を想定せざるをえないのである。

3 銅鐸祭祀から古墳祭式へ

稲米を食べることが、人間の霊に活力を与えることは——何も稲米に限らなくとも食物一般がそうであったろうから——、当初から意識されていたと思われる。この時代の秋の収穫祭の当初の粗筋は、初穂を祀ったのち、共同体の全成員が新穀を摂取し、身につけていた旧年の稲魂を新鮮かつ強精な稲魂にとり替えることであったろう。穀物のよみがえりは、同時に人間なり共同体なりにとってもよみがえりを惹きおこす関係におかれているからである。この基盤の上に、共同体に内在する首長の強力化の社会的要求が高まるならば、豊饒の象徴である初穂を食べることが首長の霊に一層の活力を与え共同体を強化するという発想を生むに至るのではなかろうか。こうして、おそらく銅鐸鑄造の中心地たる畿内においてまず、いわば穀霊の中の穀霊を身につけた強壮かつ聖なる首長が登場してくるのではなかろうか。しかし、稲魂と首長の一体化は、その性質からして、当初はむしろ一年を限りとするものであって、初穂から穀霊を秋ごとに新規に身に移し着けることが霊継ぎの古い形態なのであったのではなかろうか。

「聞く銅鐸」による稲魂祭祀は、この儀礼の成立と普及によって事実上、意味を失ってしまったのではないと思われる。この段階以後は、秋に首長は穀霊を継承し体内で育てふやし、春が到来すると穀霊を分与するという観念形式をとって種粃を共同体に還元することになるからである。こうして、穀霊と首長の生霊との融即のくり返しが、「首長霊」を恒常的な存在として定着させ独立化させる役割をはたしたことは確かであろう。

聖・俗を統一・体現した首長権の確立は、自然発生的な稲魂信仰を首長霊信仰に大きく変貌させてしまう。いまや稲粃は初穂とともに首長へいったん上納され、首長が銅鐸にかわって穀霊の守護・穀倉の管理の任にあたることとなる。それに伴い、農耕祭祀において祀られる対象は生身の首長にまで拡大され、客観的には首長の権威を高め、社会からの独立を促進していくのであった。それゆえに、神格化された首長の衰退や死は共同体のそれと同視されるようになり、首長権の継承が共同体の命運をかけた最重要の行事とみなされるにいたるのである。

銅鐸祭祀に決定的な打撃を与え廃絶に導いた要因は、各地域の首長権の承認が畿内

中枢部勢力の介入によって行なわれるようになったことであった。「見る銅鐸」の終焉と古墳の出現は、両者の分布が九州・関東をのぞいてほぼ重なりあう事実にも示されるように、かなり整合的な関係にあったことは疑えない。広範にわたる古墳祭式成立の前提となったのは、畿内を中心とする銅鐸祭祀の分布に示される共通の祭器を使用し同質の霊を祀るイデオロギーの共有状況であったが、こうした基盤の上に、穀霊祭祀形式が、変革されるならば、地方勢力はその形式をむしろ積極的に受容するのではなかろうか。すなわち、古墳築造にわずかにさかのぼる時期、まだ「見る銅鐸」が埋納されつつある時期に三角縁神獣鏡が特定の首長に配布されつつあったのである。三角縁神獣鏡を賜与することは、おそらく配布者の霊魂の分与を意味するものであって、それは倭王と一つの霊魂を共有する関係にあること、あるいはそれを媒介としてより高次の霊魂を祀る関係にあることを証明するものであったろう。こうして畿内中枢部と地方首長との間の同盟関係は次第に拡大され、西は九州、東は関東にまで及ぶようになった。その結果、畿内の外周部ははるかに拡大され、紀伊・近江・土佐といった境界線の意味は失なわれてしまう。銅鐸はもともと近畿の諸勢力が鑄造して配布したか、または祭祀を主宰していたのであったから、それにかわる新しいより効果的な祭祀形態の創出によって、過去のものとなった社会関係と相即的な古い祭祀形態が急速に色あせ捨て去られていくのは、もはや時間の問題にしかすぎなかったのである(春成 1982a)。

あとがき

銅鐸のように定点が少なく個々の事象の解釈だけでも容易でない難物には、いわゆる個別実証主義的な攻め方だけでは、なかなか歯がたたない。そこで、想像に走ることを気にしながらも、銅鐸は稲魂信仰の産物であるという一つの論理のもとに、その盛衰を弥生時代の思想と政治の歴史の関わりあいの中でとらえようと試みてきた。

本来ならば、小論を構成する各項目ごとに詳細に資料・根拠を提示し、それぞれ1編の独立した論文として順を追って発表し、その積み上げの上にかかる全体像は示されるべきであろうが、私はここでは逆に細かな実証作業の前に大ワクをつくっておく必要を痛感したために、このような形となった。小稿で提示した仮説が成立しうるか否かは、部分部分の推論・実証の可否もさることながら、結局のところ論理的整合性が認められるかどうかにかかっていると考えているが、忌憚のないご批判をいただけるならば幸いである。

小論を組立てる準備段階においては、佐原眞氏から多くの教示をいただいたが、梅原末治・佐原眞・直良信夫・三木文雄氏らの基礎的な調査・研究に負うところがきわめて大であった。さらに、1961年以来ということになるが、各地の銅鐸および出土地等の見学に際しては、赤松啓介・天羽利夫・芋本隆裕・上村和弘・浦上雅史・岡山真知子・小野田勝一・小笠原久和・勝部昭・岸加四郎・喜谷美宣・木村幹夫・酒井龍一・芝原圭之助・高井悌三郎・成田雅俊・服部又彦・藤城顕・藤瀬禎博・友久伸子・古田実・松下勝・松本正信・丸山竜平・宮本郁雄・向坂鋼二・山口博・山野由治氏らのお世話になった。論文を通して啓発された諸先学ともども記してあつくお礼申しあげる次第である。

(1979年5月・稿)

(1982年2月・補訂)

文献

- 赤松啓介・三木文雄 1969「兵庫県山崎町青木出土の銅鐸」『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈』『兵庫県文化財調査報告書』1, 258—268。
- 網干善教 1963「高床式建築考」(榎原考古学研究所編)『近畿古文化論攷』99—110, 吉川弘文館。
- 池田正男 1978「但馬国日高町久田谷出土の銅鐸」『月刊文化財』1978—11, 38—43。
- 石田幹之助 1928「饗餐紋の原義に就いて」『考古学雑誌』18—4, 1—20。
- 石野博信・関川尚功 1976『纏向』桜井市教委。
- 岩田慶治 1968「東南アジアのカミの家」(金関丈夫博士古稀記念委員会編)『日本民族と南方文化』917—944, 平凡社。
- 1970『カミの誕生 原始宗教』〈世界の宗教〉10, 淡交社。
- 1978「稲のまつり マレーシアの稲作儀礼」『季刊民族学』6, 47—57。
- 宇野圓空 1944『マライシアに於ける稲米儀礼』日光書院。
- 宇野隆夫 1977「多鈕鏡の研究」『史林』60—1, 86—117。
- 梅原末治 1927『銅鐸の研究』資料篇・図録, 大岡山書店。
- 1941「銅鐸に関する若干の新知見」『考古学雑誌』31—5, 1—27。
- 1954「一群の同范鑄造銅鐸の絵画について」『上代文化』24, 1—12。
- 1960「新出土の銅鐸の鎔范片其他」『古代学研究』25, 1—7。
- 1968「越前大石村出土の銅鐸の絵画」『日本民族と南方文化』163—185, 平凡社。
- 大林太良 1973『稲作の神話』弘文堂。
- 1979「原始の美と呪術」『図説日本文化の歴史』1, 203—211, 小学館。
- 小野重明 1970『農耕儀礼の研究』弘文堂。
- 1977『神々の原郷—南島の基層文化—』法政大学出版局。
- 笠井敏光編 1979『西浦銅鐸』〈羽曳野市埋蔵文化財調査報告書〉1。
- 勝部 昭 1976『志谷奥遺跡』鹿島町教委。
- 金関丈夫 1975『発掘から推理する』34—40, 朝日新聞社。
- 川西宏幸 1975「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』61—2, 17—47。
- 木村徳国 1979『古代建築のイメージ』日本放送出版協会。
- 清野謙次 1928「伯耆出雲より周防へ」『民族』3—6, 148—152。

- 久野邦雄・寺沢 薫 1978 『昭和52年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町教委。
 神戸市教育委員会 1980 『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教委。
 後藤 直 1978 『銅矛と銅鐸』〈福岡市立歴史資料館図録〉3。
 モーリス・ゴドリエ(山内和訳) 1976 『人類学の地平と針路』紀伊国屋書店。
 小林行雄 1959 『古墳の話』岩波書店。
 1961 『古墳時代の研究』青木書店。
 1965 『古鏡』学生社。
 1967 『女王国の出現』〈国民の歴史〉1, 文英堂。
 近藤義郎 1966 「弥生文化の発達と社会関係の変化」『日本の考古学』Ⅲ, 442—459, 河出書房。
 1966 「古墳発生をめぐる諸問題」『日本の考古学』Ⅴ, 356—388。
 近藤義郎・根木 修 1973 「岡山市百枝月発見の銅鐸」『考古学研究』19—4, 114。
 酒井卯作 1958 『稲の祭』岩崎書店。
 酒井龍一 1978 「銅鐸・その内なる世界」『摂河泉文化資料』10, 1—15, 北村文庫会。
 1980 「銅鐸(邪気と封じこめのオブジェ)論」『摂河泉文化資料』21, 1—16。
 桜ヶ丘銅鐸銅戈調査委員会 1966・69 『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈』図版篇・解説篇, 〈兵庫県文化財調査報告〉1。
 佐原 眞 1960a 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』2, 92—104, 平凡社。
 1960b 「銅鐸文化圏」『図説世界文化史大系』20, 162—167, 角川書店。
 1964 「銅鐸」『日本原始美術』4, 135—144, 講談社。
 佐原眞・町田章 1968 「和歌山市有本出土銅鐸」『和歌山県文化財学術調査報告書』3, 63—85。
 佐原 眞 1972 「流水紋」『日本の紋様』8, 9—24, 光琳社。
 1973 「銅鐸の絵物語」『国文学』13—3, 45—53。
 1974a 「銅鐸の祭り」『古代史発掘』5, 96—104, 講談社。
 1974b 「銅鐸出土地名表」同上, 154—160。
 1979 『銅鐸』〈日本の原始美術〉7, 講談社。
 1980 「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』66—1, 102—117。
 1981a 「銅鐸と武器形青銅祭器」『三世紀の考古学』中, 302—319, 学生社。
 1981b 「遍歴の鑄物師たち」『考古学ジャーナル』194, 1。
 島田貞彦 1928 「和泉国泉北郡浜寺町発見の銅鐸」『歴史と地理』21—6, 56—60。
 白川 静 1979 『中国古代の文化』講談社。
 田中 琢 1970 「〈まつり〉から〈まつりごと〉へ」『古代の日本』5, 44—59, 角川書店。
 1977 『鐸 剣 鏡』『日本原始美術大系』4, 講談社。
 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22—3, 31—61。
 田辺繁治 1978 「ランナータイにおける環境認識」(石毛直道編)『環境と文化 人類学的考察』81—131, 日本放送出版協会。
 田辺昭三・佐原 眞 1964 「京都市梅が畑出土の銅鐸」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』8—9。
 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」『講座日本史』1, 29—66, 東大出版会。
 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20—4, 20—47。
 1979 「農業共同体概念の歴史的位置」『新しい歴史学のために』154, 1—11, 民科京都支部歴史部会。
 1979 「集落と地域圏—ムラとムラとの交流」(樋口隆康編)『日本文化の歴史』1,

- 153—176, 小学館。
- 坪井清足 1968 「卑人楯」『日本民族と南方文化』297—305, 平凡社。
- 直良信夫 1928 「閩賀発見の銅鐸とその出土状態」『考古学研究』2—2, 23—36。
- 直良信夫・直良勇二 1929 「垂水村新発見の銅鐸とその出土状態」『考古学雑誌』19—2, 14—25。
- 直良信夫 1929 「伯耆米里発見の銅鐸とその出土状態」『考古学雑誌』19—10, 24—31。
- 1932 「石見上府村発見銅鐸の出土状態」『考古学雑誌』22—2, 43—49。
- 1943 『近畿古代文化叢考』葦牙書房。
- 原口正三 1977 「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』1, 113—332。
- 原島礼二 1968 『日本古代社会の基礎構造』17—178, 未来社。
- 原田淑人 1960 「サナギ(鐸・鉄鐸)というもの」『聖心女子大学論叢』8, 56—64。
- 春成秀爾 1978 「銅鐸の埋納と分布の意味」『歴史公論』4—3, 87—97。
- 1982a 「銅鐸祭祀の終焉」『歴史公論』8—4, 95—103。
- 1982b 「前方後円墳論」『東アジア世界における日本古代史講座』2, 174—211, 学生社。
- 東大阪市遺跡保護調査会 1981 『鬼虎川の銅鐸鋳型』東大阪市。
- 樋口隆康編 1974 『大陸文化と青銅器』〈古代史発掘〉5, 講談社。
- 日高町史編集専門委員会 1980 『日高町史資料編』120—124, 日高町。
- 平野和男・向坂鋼二 1965 「静岡県引佐郡三ヶ日町猪久保出土の銅鐸について」『考古学雑誌』51—1, 60—67。
- 藤井直正・田代克己・島田義明 1976 『宝塚市中山出土の銅鐸』〈宝塚市文化財調査報告〉8。
- 藤沢眞依 1976 『東奈良』東奈良遺跡調査会。
- 松岡秀夫 1976 「赤穂市上高野発見の銅鐸銘范」『考古学研究』23—2, 51—58。
- 松平斉光 1946 『祭 本質と諸相』日光書院。
- 1959 「稻魂」(岩村忍・関敬吾編)『日本の民族・文化』274—278, 講談社。
- 松本信広 1965 「古代インドシナ稲作民宗教思想の研究—古銅鼓の文様を通じて見たる—」(松本編)『インドシナ研究 東南アジア稲作民族文化総合調査報告(一)』1—160, 有隣堂。
- 1966 『日本の神話』1—189, 至文堂。
- 丸山竜平 1980 「銅鐸の終焉」『日本歴史』385, 67—83。
- 三本文雄 1950 「阿波国名西郡源田出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』36—2。
- 1965 「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』50—4, 21—40。
- 1974 『流水文銅鐸の研究』吉川弘文館。
- 三品彰英 1968 「銅鐸小考」『朝鮮学報』49, 361—373。
- 1973 『古代祭政と穀霊信仰』〈三品彰英論文集〉5, 平凡社。
- 1974 「神話の世界」『図説日本の歴史』2, 集英社。
- 水野正好 1962 「滋賀県野洲郡野洲町小篠原銅鐸埋蔵遺跡調査概要」『日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨』22—23。
- 1973 「古墳発生の論理(1)」『考古学研究』18—4, 26—39。
- 1978 「もう一つの銅鐸観」『日本歴史』367, 85—91。
- 森 浩一 1974 「和歌山市砂山出土の銅鐸の復元にさいして」『古代学研究』71, 33。
- 森岡秀人 1975 「銅鐸と高地性集落」『芦の芽』27, 17—30, 芦の芽グループ。
- INEZ DE BEAUCLAIR 1960: A MIAO TRIBE OF SOUTHEAST KWEICHOW AND ITS CULTURAL CONFIGURATION. Bulletin of The Institute of Ethnology Academia Sinica, No. 10, 127—205, Formosa.

追記

校正までの間に知りえた点について若干のコメントを付しておきたい。

(1) 銅鐸の石製鑄型が次の2遺跡から発掘された。

山城・向日市鶏冠井石橋 石型1 個体分(外式、袈?)

筑前・福岡市博多区席田赤穂ノ浦 石型1 (外式、横帯文)

ともにその鑄型でつくられた銅鐸は知られていない。安永田、赤穂ノ浦遺跡と北九州での横帯文鐸鑄型の検出がつづき、いわゆる福田型の邪視文鐸の鑄造地を北九州に限定できそうであるが、伴出土器は九州の弥生中期中葉以降とされる。製品の分布が銅鐸分布の西限にあたる中国地方に集中していること、畿内産の外縁付鈕式鐸の年代的な関係などがあらためて問題となろう。

(2) 伯耆・東伯郡羽合町長瀬高浜遺跡の竪穴住居址直上から銅鐸が検出された(1981『長瀬高浜だより』31, 同調査事務所)。高さ8.7cmの小形品ではあるが、外縁付鈕1式で鈕には連続渦文が施されている。共伴した土器は布留式であるというから、「聞く銅鐸」の一部が古墳時代初頭まで伝世使用されていたことを示す資料となろう。それが、埋納という形をとっていなかった点も注意されるところである。

(3) 注目すべき論考としては次の2篇があげられる。

鬼頭清明 1982 「原始経済の発展」(永原慶二ほか編)『日本経済史を学ぶ』上, 1-27, 有斐閣。

鬼頭氏は、弥生時代における「諸部族間の対立は、それぞれの部族と共同体の権威の強化を必要とした。」「首長は共同体の権威を示すための祭儀を量的にも質的にも多大な労働を消費することによって遂行する必要があった。」とし、銅鐸や墳丘墓にかかる「浪費」の一例証とみなしている。しかし、「弥生時代の浪費は、銅鐸や銅戈のように、首長墓に副葬されることがなく、首長個人には所属せず、共同体全体に所属する祭器があり、首長個人の所持する祭器や装飾品が少ない点では古墳時代と様相が異なる。古墳時代では共同体全体を完全に首長が代表することとなり、「浪費」も首長個人に附属したものとなる」と、総括している。したがって、小論およびそれに先行してまとめた「前方後円墳論」において、筆者も不十分ながら同趣旨のことを述べていることになる。

都出比呂志 1982 「原始土器と女性」(女性史総合研究会編)『日本女性史』1, 1-42, 東大出版会。

都出氏は、銅鐸面の絵画について、「自然界の弱肉強食の輪廻のすべてをつかさどる人間が強調され、さらに……自然界・人間界を通じての争いの輪廻の中で最も優位に立つ大人の男性の姿が説かれている可能性がある」と考え、さらに絵物語的要素をもっとも多くもつ越前・井向1号鐸の「船団」や戦闘の絵から「抽象化された英雄叙事詩の息吹きさえ感じとる」。「これと倉庫の絵とを結びつけば、戦闘の結果、戦いといった安定した社会における、収穫稲の管理を掌る男の首長の威信を説いているとも読みとれる」とし、「銅鐸を用いる祭りには、牧歌的な共同体の平等と平和の農耕祭だけではなく、共同体首長の威信を誇示する動きを認めるのではないだろうか」と提言している。

銅鐸の絵画の機能の推定のむづかしさは、それを描いた工人なり工人集団の有していた説話・伝承などがその描かれた製品の配布をうけた集団においては、いかにうけとめられていたか、という点にもある。つまり、製作集団においては原体験にもとづく伝承的なものであったとしても、鑄造地から遠隔の被配布集団——井向1号鐸は摂津・河内・大和のいずれかで製作された可能性がつよい——にとっては意味不明の絵画であったとも限らない。そのようなことも考慮しなければならないとすれば、たとえば製作集団にとっては絵画に「共同体首長の威信を誇示する」意味がこめられていたとしても、それほど高く評価できるかどうかはなお議論を必要とするように思われる。

銅鐸の時代

- (4) 日本における呪物や神体の土中保管例として次の例を知った。

東京都府中市人見では、大正時代までは、石に像を彫った塞の神は祭りが済むと穴を掘って埋めておき、明くる年の祭の時にはまた掘り出してきれいに洗って祭壇を設けて祭っていた。そして、それに近いようなことは方々でやっていた、という。

宮本常一 1981 『日本文化の形成』講義2, 228—229, そしえて。

宮城県船形山神社に神体として伝わる高さ19.4cmの金銅菩薩立像は、古代朝鮮からの渡来仏と推定されているが、平生は山麓に埋めてあり、例祭の日に、別当により秘密の場所から掘り出され、拝殿に安置される、という。

久野 健 1980 「飛鳥仏の誕生」『美術研究』315, 5—7, 東京国立文化財研究所。

- (5) 銅鐸の埋納を「境界の呪儀」と結びつける説は、三品彰英氏(1968)が最初で、その後、筆者(1978)や酒井龍一氏(1978)が継承したが、大林太良氏(1979)も積極的にとりあげている。また、白川静氏(1979)が、殷代の彝器(青銅祭器)がやはり、殷都を遠く離れた辺境の地に埋蔵されていることについて、異族を呪詛し、悪霊を圧服するために呪儀を行なった痕跡であると論じ、日本の銅鐸についても論及している。

- (6) 岩田慶治氏(1978)の調査によると、マレーシアのケラビット族は、収穫作業後、家家で銅鐸を打ち鳴らして稻魂をよび集め、その銅鐸を米倉のなかに置く習俗をもっている。しかし、昔は稻魂はひとりで家へ帰ってきた、ということである。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)